



TITLE:

中國古代の玉器、琮について

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

CITATION:

林, 巳奈夫. 中國古代の玉器、琮について. 東方學報 1988, 60: 1-72

ISSUE DATE:

1988-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66683>

RIGHT:

中國古代の玉器、琮について

林 巳奈夫

一 前言	一頁	(8) 殷後期	一五頁
二 琮の遺物	二頁	(9) 西周	二二頁
(1) 崧澤類型と良渚文化	三頁	(10) 春秋	二二頁
石峽第三期文化	八頁	(11) 戰國	二四頁
山東龍山文化	九頁	三 琮は「主」である	二七頁
龍山文化陶寺類型	一一頁	四 琮—「主」の機能	三二頁
出土地不明龍山系文化	一一頁	五 社の「主」	三九頁
二里頭文化	一三頁	六 社における神の現存の圖像	四八頁
早期巴人文化	一五頁		

一 前 言

中國に古く方形で中央に圓孔を穿つた玉器があつて琮と呼ばれた⁽¹⁾。それは『周禮』春官、大宗伯に「蒼璧を以つて天を禮し、黃琮を以つて地を禮し、青圭を以つて東方を禮し、赤璋を以つて南方を禮し……」といふやうに、天地と關係づけられて現れ、これが永い間中國古代の玉器の概説や圖版の解説に引用されつづけて來た。璧、琮、圭、璋等がそのやうに關係づけられたについては、鄭玄が注で解説するやうに「神を禮する者は必ずその類に象る。璧の圓は天を象り、琮の八方は地を象る……」といふ趣旨によるものであつたことは間違ひなからう。然し戰國末頃に顯著となる五行説と結びつい

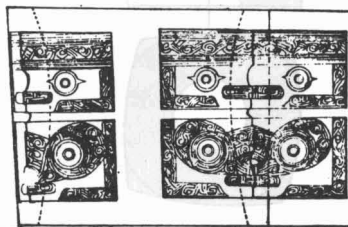
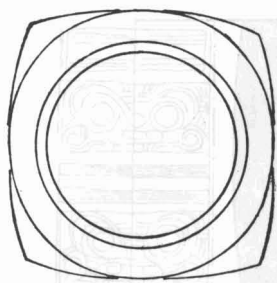
た色とか、漢代に盛んになる天圓地方の觀念に結びつけたこのやうな解釋は、紀元前三千年紀に遡る琮の性格を考へる場合、到底鵜呑みにすることができない體のものである。^③『周禮』には他に各種の型式の琮が特定の用途を持つたものとして記されてゐるが、琮が本來いかなる機能と性格を持つたものかを考へる材料としては使ふことができない。この問題について近人に思ひ思ひの説があるが、^④いづれも當て推量に近いものに留つてゐる。

これは第一にはこの器物が戰國時代に跡を斷ち、文獻資料の豊富になる時代それについての正確な知識の失はれてゐた玉器であること、また第二にはその用途を推測する手掛りを提供すべき發掘データを缺いてゐたことによる、と考へられる。第二の方については、近時揚子江下流域の良渚文化に少なからざる發掘例が出てきて、琮が有孔玉斧と共に墓中で死體の周圍に埋められてゐる事例が知られるに至つた。然しそれらについては、被葬者がそれを使用して祭祀を行ふ權利を持つてゐたことを示すと解釋されたり、^⑤それら玉器類が死體を保護する宗教的・呪術的な力を持つたものと説明されたり^⑥してゐるとはいへ、琮についてはそれに想定される機能とその形態とが如何様に結びつくのか、肝腎な所は言及すらされないままに留つてゐる。

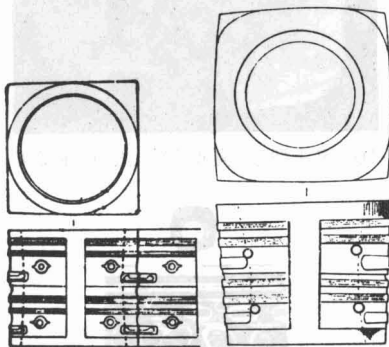
この獨特な形を持つた玉器の本來の用途についての問題は、筆者にとつて永い間の宿題であつた。この所遺物の觀察と古典の記載とからその解答を得たと考へる。これは本來古典に「圭」と呼ばれたものに對應する遺物である。以下にそれを記したい。

二 琮の遺物

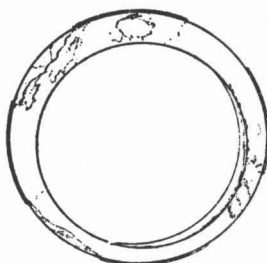
琮が本來何であつたかを論ずるに當り、先づ各時代にどのやうな遺物が知られてゐるかについて記しておくのが順序であらう。誰もがそれについて認識してゐるといふ分野ではないと考へられるからである。



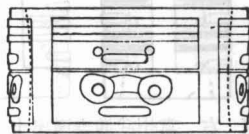
(4) AN型琮 常州武進寺墩出土 圖2/5



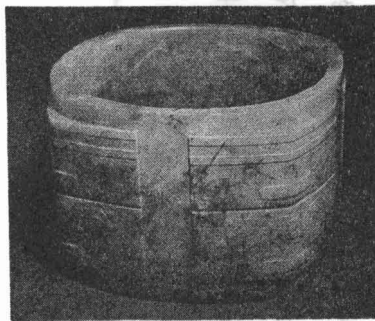
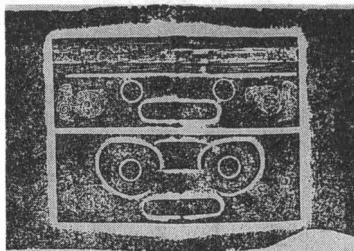
三 (5) AV型琮 左 昆山綽墩出土 1/4
右 常州武進寺墩出土 1/3



(1) A I 型琮 吳縣張陵山出土 1/3



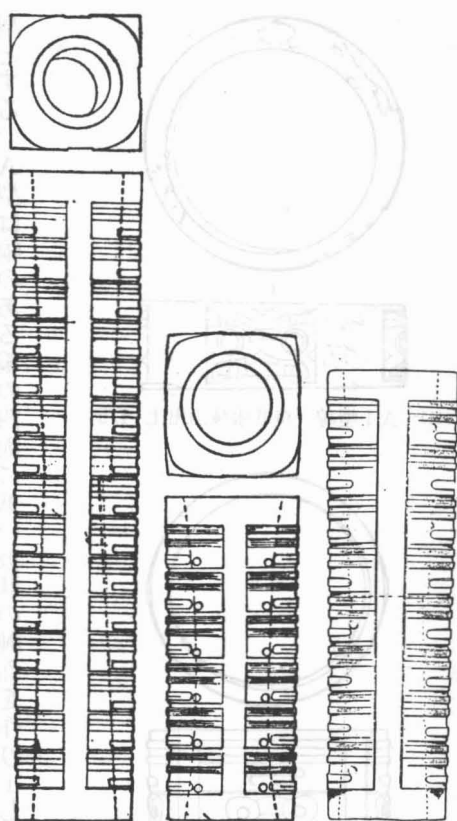
(2) A II 型琮 常州武進寺墩出土 2/5



(3) AⅢ型琮 上海福泉山出土 高5cm

近時よく知られるやうに、琮が一番古く發達したのは揚子江下流域の良渚文化においてである。王巍⁽⁸⁾はその琮を型式によつて分類し、年代の早晩を考察してゐる。それを紹介すると、先づ器の横幅より高さの小さなものをA型、大きなものをB型とする。A型は幅のある環の四面に低い板狀の神面を作り出したもの（圖1、(1)）から、神面の鼻筋の線が稜をなして

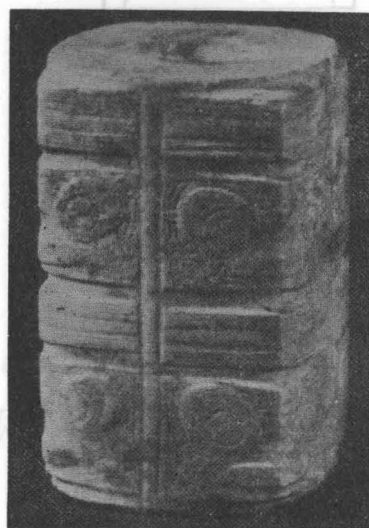
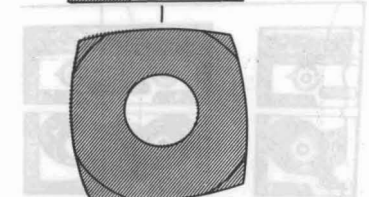
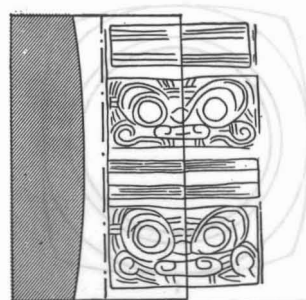
は良渚文化早期、AⅡ、Ⅲ式を晩期の内の早い時期、AⅤ式を晩い時期とする。B型についてはAⅡ・Ⅲ式とBⅡ式、AⅤ式とBⅢ式の共存関係を指摘してゐる。大體さういつた所であらう。ただAⅠ式琮の出土した吳縣張陵山四號墓を王氏は良渚文化の早い時期としてゐるが、張陵山の發掘報告にはこの墓は下層のもので崧澤類型に屬すると記される^⑩。神面の



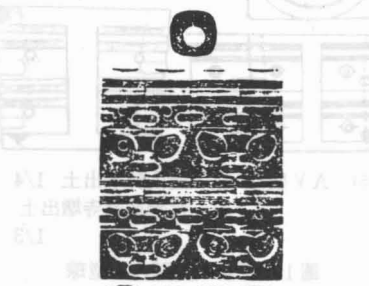
(3) BⅢ型琮 右 常州武進寺墩出土 1/3
中 常州武進寺墩出土 1/4
左 常州武進寺墩出土 1/4

圖2 王巍氏分類のB型琮

突出して來て(圖1、(2)、それが次第に高くなり(圖1、(3)(4)、終りに横断面が正方形になる(圖1、(5)、としてこれを五段階、AⅠ式—AⅤ式とする。B型は横断面がA(1)式に對應する位の形を持つもの(圖2、(1)から横断面が正方形をなすもの(圖2、(3)へ三段階、BⅠ式—BⅢ式に分ける。そして伴出土器により、AⅠ式



(1) BⅠ型琮 吳縣草鞋山出土 圖3/4



(2) BⅡ型琮 上海福泉山出土 3/7

大きな圓い目、眉、牙をむいた兔口形の口などに良渚文化のものと明瞭に區別される特色が認められ、良渚文化より一段階古い文化に屬さしめるのが妥當と思われる。またBⅡ式の器は上海福泉山六號墓の出土品であるが、他には常熟黃土山の採集品が一例に引かれてゐるが、佩玉といった用途の想像される高さ六・五cmのミニチュアチャードであり、BⅡ式として一つの式を立てるのは見當外れと言へよう。

さてA型B型とも四隅に神面を刻するものがあり、それについて王氏は次のやうに記す。即ち、AⅠ式では神面が線刻される。AⅡ式では器側は凹槽で水平に上下に分けられ、上下に二種の神面が刻され、下のは橢圓形の目、上のものは圓圈の目を持つ。夫々目の下に短い水平の棒状のものが作り出され、これが口を表はす。¹² AⅢ式では二種の神面はⅡ式と同様であるが目、鼻筋、額、口等には毛髮のやうな細い線で幾何學的な紋様の刻されるものがある。AⅣ式では細線の紋様が刻されることⅢ式と同様であるが、額の縁どりに同じ紋様があり、上の神面の圓圈の兩側に目頭と目尻を表はす三角形が加へられる。AⅤ式では上下の神面とも圓圈乃至圓圈の兩側に三角を加へた目を持つものとなる。BⅠ式ではAⅢ式の下側の神面と同式のもが重ねられ、BⅡ式では圓圈の目の神面または橢圓形の目の神面が重ねられる、と言ひ、BⅢ式では圓圈乃至圓圈の兩側に三角を加へた目の神面が何層も重ねられる、とする。王氏はAⅡ式に見る二重の神面の内、橢圓形の目を持つ類を象形獸面紋、圓圈で目を表はす方を簡化獸面紋と呼ぶが、この呼稱は適當でない。前者は何等かの現實にゐる動物の顔を象つたものとは到底認められず、後者は前者と同一器上に重ねて刻されてゐて明かに別種であり、前者を簡化したものとは解し得ないからである。¹³

以上王氏によつて松澤、良渚の琮の概略を紹介したが、この類については他に注意しておくべき特徴が幾つかあるので、それを記しておく。王氏のAⅢ式、Ⅳ式は神面の刻線が最も丁寧で器の表面の仕上げも精密なものの含まれる類である。この類はまた孔の内壁が意識的に上下の口に向つて朝顔狀に外擴がりに仕上げられてゐる（圖1、(5)右、圖1、(4)）。他人の作つた實測圖の信頼性には問題のあることがあるので、孔の斷面形の見える遺物の寫眞を圖3に引いておく。¹⁴ AⅤ式

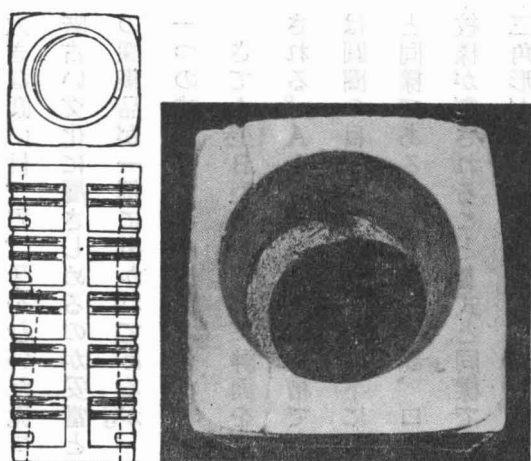


圖5 良渚文化 琮 常州武進寺墩出土 圖1/4



圖3 良渚文化 琮 出土地不明 Norton Gallery and School of Art, West Palm Beach 高4.9 cm

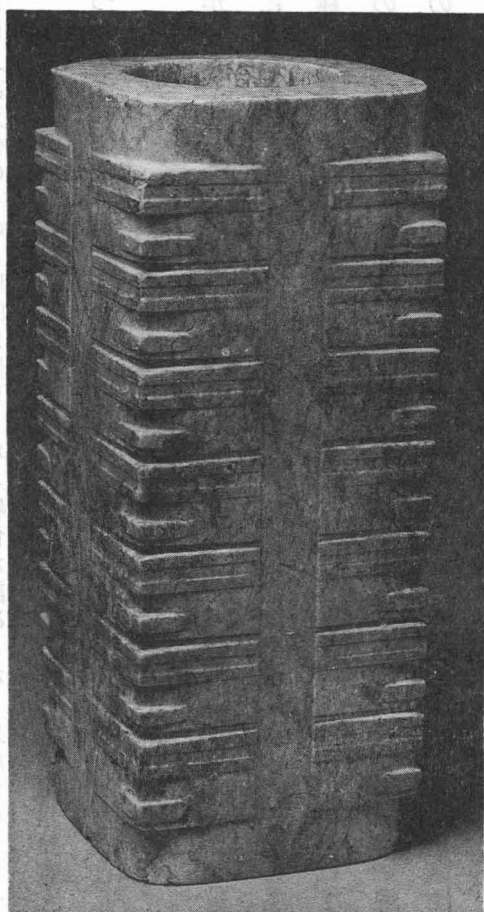


圖6 良渚文化 琮 吳縣草鞋山出土 高18.5 cm

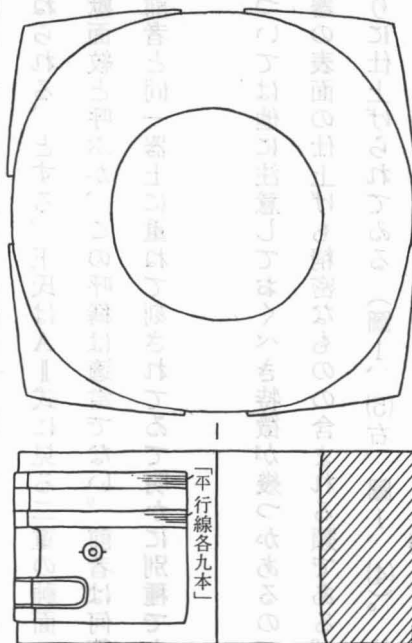


圖4 良渚文化 琮 出土地不明 出光美術館 1/2

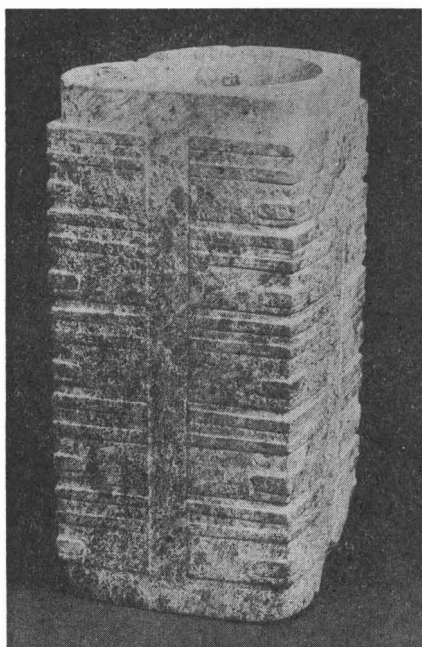


圖10 石峽第三期文化 琮 曲江石峽出土
高 13.8 cm

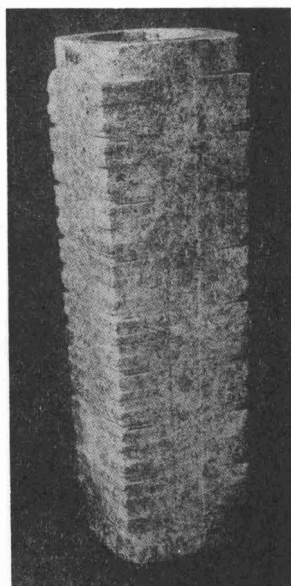


圖7 良渚文化 琮 常州武進寺墩出土 高 23 cm

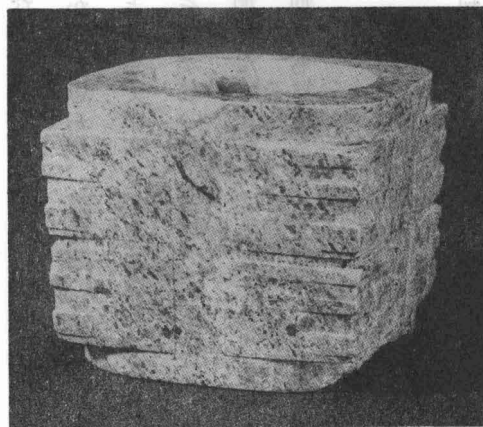


圖8 良渚文化 琮 常州武進寺墩出土 高 5.4 cm



圖11 石峽第三期文化 琮 曲江石峽出土
高 4.4 cm

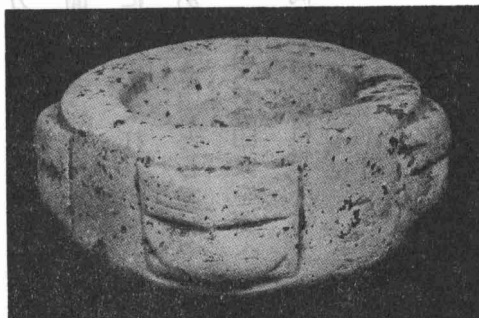


圖9 石峽第三期文化 琮 曲江石峽出土
高 3.3 cm

では孔が朝顔狀に擴がらないものが多く見られるが、AⅢ式、Ⅳ式と同様外擴がりに仕上げられたものもある(圖1、5)。圖4は出土地不明の白雞骨化した遺物であるが、筆者の實測圖。孔の上の口は口の近くがほんの心持ち磨り擴げられ、下の口の近くはやや廣い範圍が磨り擴げられてゐる。またA型は各式とも孔の内面も丁寧に磨き上げ、光澤が出されてゐることも特徴として擧げておく必要がある。

孔の内面がきれいに磨き上げてあるといふ特徴はB型にも普通に見る所である。丈の高い玉材に貫通した孔を穿けるのであるから、兩側から穿孔して行つたことが想像され、コレクション中の遺物で觀察した限り、きれいに仕上げられた孔でも、兩側から穿つて行つた孔の喰ひ違ひによつて生じた段を苦勞して修正し、何とか平滑に仕上げた跡が多少とも残つてゐるのが普通である。近時の發掘品の中にはBⅢ式の丈の高い琮で、兩側から圓筒形の道具を使用して穿孔してゆき、中間の出遇つた部分に生じた段をそのまま残し、仕上げる工程を省いたものがある(圖5)。所謂玉斂葬のために大量生産された明器であることによる可能性も考へられる。BⅢ式について近時よく知られるもう一つの特徴は、神面の上下方向に合せて立ててみると、方柱部がやや上擴がりになつてゐることであるが、もう一つ、方柱部から上下に突出した圓筒部の作りのくせがある。圖67に引いた寫眞でもわかると思ふが、方柱部の稜角、即ち神面が正面に來るやうにして横から見ると、原則として圓筒部の上の突出が下の突出よりも丈が高く、上の突出は基部が内に磨り込まれ、やや上擴がりに見えるやうに仕上げられてゐる。一方下の突出ではそれがないか、あつても僅かなことである。全體として、やや上擴がりの筒形の胴に、上擴がりの口頸部と、低い絲底を加へた、花瓶にでもなぞらへられる形、といった印象を與へる。この特徴は、さう思つてみると同式の神面をつけたAⅤ型にも見出される(圖8)。上下の圓筒部の突出は當然低く、控え目などではあるが。

(2) 石峽第三期文化

廣東省北部の曲江縣石峽遺蹟から玉琮を模した石製の琮が発見されてゐる(圖9-11)。發掘報告で第三期とされる墓¹³

の出土品で、圖10の琮が吳縣草鞋山上層墓の出土品とよく似る所から、時代的にもそれと平行のものとされる。¹⁹ 圖10は確かに良渚文化のものそのままであるが、圖11の神面の目が目頭からは卷鬚狀の線が出、頬にも卷き上つた鬚狀の線があるなど、現在良渚文化の琮には知られない特徴を持つ。また圖9も神面の頬から下顎の輪廓が彫られてゐる點についても同じことが言へる。

(3) 山東龍山文化

圖12は殷墟婦好墓出土の琮であるが、先に筆者はそこに刻まれた縦向の槽紋及び「鬼臉」風の紋様を山東龍山文化の黒陶容器の槽紋及び同文化の鼎足の「鬼臉」と對比し、それらをその文化に屬するものと考へた。この考へは今の所變つてゐない。これらはいはば武骨な作りのものであるが、同じ文化に屬すると考へられるもつとデリケートな作りの遺物がある。管見に觸れた所では唯一のものであるが、圖13のやうなものである。灰色及び褐色の不透明部分と灰綠色の半透明部分の混つた玉質で、實側圖に見るやうに薄手に仕上げられてゐる。この圖13に示した器は良渚文化の神面の顔の上を限る二本の突帶と、鼻を表はす短い突帶を、低い平行の突線に代へて表はし、目を略したものである。ここに見るやうな作り出しの低い平行の突線は、山東龍山文化の特徴の顯著な鬼神面の玉の、顔の下スタンド狀の部分に使はれてゐる。²⁰ この技法からこの琮も同じ文化に屬すると判斷した。良渚文化の神面を重ねて刻した琮を、山東龍山文化の人が自らの技法に翻案して寫したものと見られる。この琮の神面には目が略されてゐるが、良渚文化の琮で丈の高い類の内、王氏のBⅢ位のものには神面から目を略したものがあ²¹るから、あながち無知によつて異文化の神面から目を落した、と言ふことはできない。然しこの琮を上から見ると、四隈の神面の突出は低く、王氏の分類のAⅢ型位に對應し、良渚文化の琮を手本にしたとすると古い段階のものを模したことになるが、良渚文化の琮の神面では、この段階で目を省いたものはないやうである。とするとこの圖13の琮の神面は良渚文化のものの大略の外見を寫したもので、目は見落されたか略されたのだ、といふことも考へられる。この點については資料の増加を俟つ他ない。

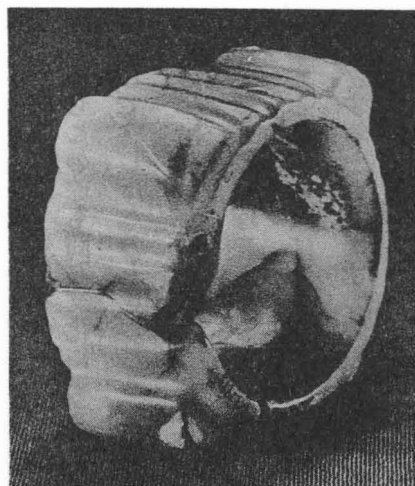


圖12 山東龍山文化 琮 安陽小屯婦好墓出土 拓3/5

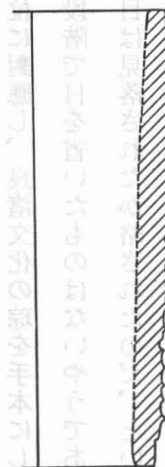


圖13 山東龍山文化 琮 出土地不明 Norton Gallery and School of Art, West Palm Beach 圖 1/2

この琮も良渚文化のもののやうにやや上擴がりに成形され、また孔の内面はよく磨かれてゐる。更に孔の上の口は角が磨滅し、下の口には角から數ミリの範圍にわたり、石斧の刃に見受けるやうな強い磨滅とその結果生じた細い溝が認められる。このやうな使用痕のある琮は他に氣がつかない。その解釋は保留しておく。

(4) 龍山文化陶寺類型

山西襄汾の陶寺遺蹟で發掘された龍山系文化は地域的な特徴を持ち、陶寺類型と名づけられてゐる。²³ この文化はカーボン・デイトーングにより、大體前二五世紀から前一八世紀に屬するものと考へられてゐる。²⁴ この遺蹟の第一回發掘により、圖14のやうな玉琮が發見された。陶寺類型の晩期とされるから、大體前三千年紀末から二千年紀初といふことになる。圖14左は高一・三cm、一邊六cmの低いもので、青綠色、精緻な作といふ。²⁵ 圖14右は外が不等邊八角形で、各邊の面に三本の横槽を入れるといふ。琮に入れてよいか問題であるが、參考として引いておく。孔の内徑六cm、高二・六cm、青白色の玉といふ。²⁶ 圖15は石製、白色で、幅五cm、高二・九cmと記される。²⁷

圖14左、15から陶寺類型の琮の特徴として、方柱部が四隅に圓味を持たせた方形に成形される點が看取されよう。圖18はそのやうな特色を持った琮である。淡黃灰色、半透明の玉で鐵銹色の大きな斑がある。方柱部には十二本の横槽が刻まれており、圖14右の八角柱形の遺物を思ひ起させる。陶寺類型に屬する遺物かどうかは斷定できないが、それとの親近性を示唆するので參考に掲げておく。

(5) 出土地不明龍山系文化

圖16に引いた白雞骨化した破片も實測圖でわかるやうに前節で見たのと共通の特色を持つてゐる。ただ丈がずっと高い。寫眞で上になつてゐる圓筒部の小口を平らに置いてみると、測圖で示したやうに方柱の隅角が僅かに外に傾く。良渚文化の丈の高い類の琮のやうに、方柱部は上擴がりになつてゐることが知られる。この型式のものの發掘例は現在の所知られないが、方柱部が隅圓に作られてゐる所からこの節で扱つておく。

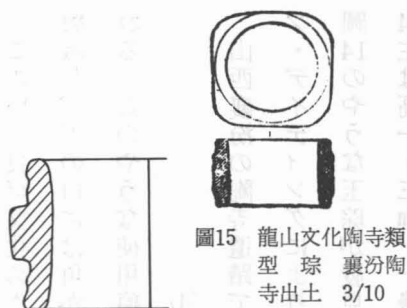


圖15 龍山文化陶寺類型 琮 襄汾陶寺出土 3/10

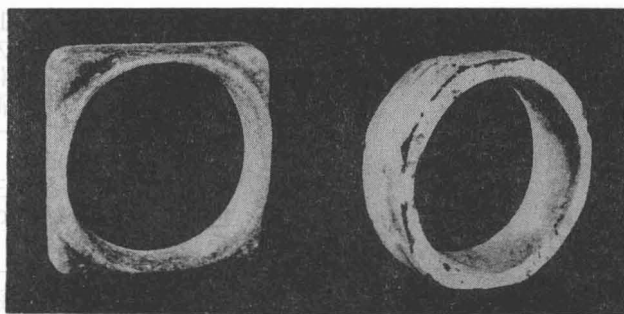


圖14 龍山文化陶寺類型 琮 襄汾陶寺出土
左高 1.3 cm 右高 2.6 cm

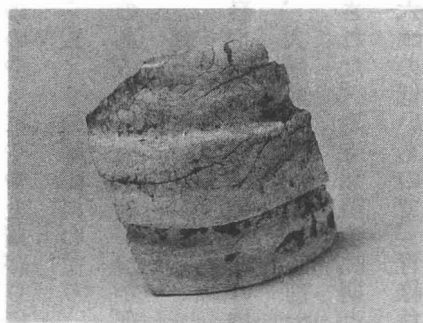


圖17 龍山系文化 琮 出土地不明
County of the Royal Ontario
Museum, Toronto 圖1/2

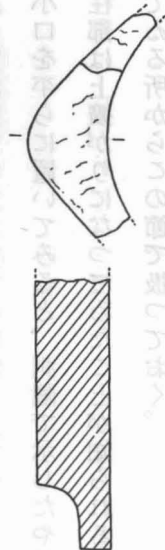


圖16 龍山系文化 琮 出土地不明
京都大學文學部博物館 圖1/2

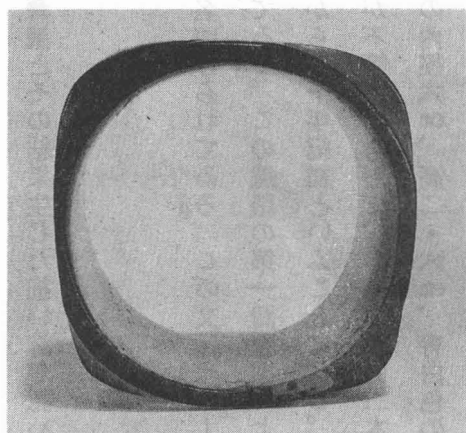


圖18 龍山系文化 琮 出土地不明 國立故宮博物院 高 5.8 cm



圖17に引いた白雞骨化した琮の斷片も、上から見ると方柱部が隅を圓くした正方形であつたことが知られる。孔の半徑は約二・六cmと復原される。この琮は然し圖16とは全く異なり、方柱部から出る圓筒部の外壁には上下共淺い溝が入れられてをり、全體に稜角に圓味がつけられてゐる。斷面圖に見るやうに、小口の一方が平らで坐りが良く、反對の口は圓く作られ、また圓筒部は全體に下擴がりに作られ、明かに平らな小口を下に据えて使ふやうになつてゐる。

圖16はカチツと稜角を立てた作りであるに對し、圖17は全體に圓味のある作行きで、兩者感覺が全く異なつてをり、その屬した文化にも相違があつたことが察せられる。方柱部の作りの特徴といふ點から同じ所に扱つた。

(6) 二里頭文化

二里頭文化は河南龍山文化に續き、二里岡文化に先立つ文化で、カーボンデイティングによると大體前一九〇〇年から一五〇〇年位の所に納まると考へるのが妥當とされてゐる。²⁸ 四期に分けられ、その文化と傳説的な夏王朝とがどのやうな關係にあるかは中國人學者達の無數の論文の種となつてゐるが、²⁹ ここでは觸れる必要がない。

二里頭遺蹟からは一九六〇—四年の發掘で琮の斷片が一個出てゐる(圖19)。この頃の發掘であるからどの期に屬するかは明かにされてゐない。小さい斷片でもあり、實檢の機も得ないため、どのやうな型式のものか寫眞では判定し難い。

これとは別に、筆者が二里頭期に特徴的なものとした渦紋³⁰がつけられてゐることにより、その時期のものと判定した琮がある、殷墟婦好墓の出土品で、圖20に引いたごときものである。これは細工が少々粗いが、圖21に引いた白雞骨化した琮の斷片は入念な作である。端にボタン狀の粒のつく渦紋、縱横の平行線の刻紋の特徴は圖20と一致してゐる。圖20と21の相違はまた次の點にも認められる。即ち、前者が圓筒の四隅に小さい切妻屋根の形の突起を加へたといふ形になつてゐるのに對し、後者は方柱の中央に圓筒を合體させた形をとつてゐることである。圖21で方柱の角を圓くした所は圖14 15の陶寺の出土品とよく似てをり、同じ傳統に屬することが知られる。圖20の方も、下の器は寫眞で見ても突出部の角に圓味が見られ、圖21とその點やはり同じ特徴を共有してゐることが知られる。二里頭文化に二つの異つた型式の琮が併存した



圖19 二里頭文化 琮 偃師二里頭出土 高約5.3 cm

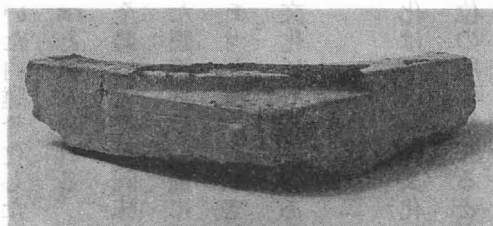


圖21 二里頭文化 琮 出土地不明 Courtesy of the Royal Ontario Museum, Toronto 拓2/3

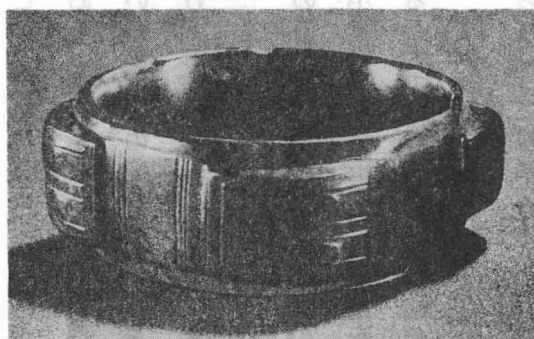
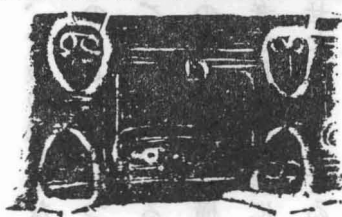


圖20 二里頭文化 琮 安陽小屯婦好墓出土 拓3/5

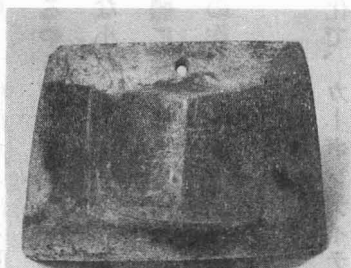


圖22 二里頭文化 琮再利用品 出土地不明 Courtesy of the Harvard University Art Museums (Arthur M. Sackler Museum) Bequest-Grenville L. Winthrop 高約2.9 cm

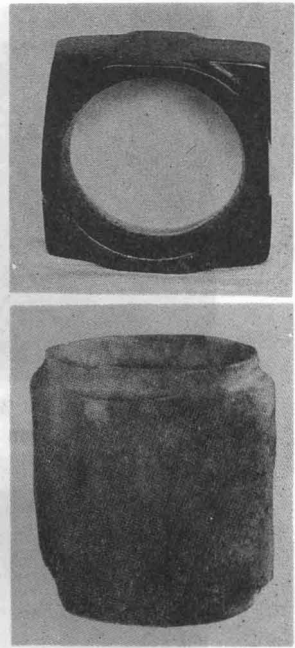


圖23 早期巴人文化 琮 廣漢中興公社出土 四川省博物館 高11cm 左江村治樹氏攝

ことが知られた。この兩種は殷後期にも見出されるものである。

他に、琮の四隅の突出部を利用した再加工品で圖22のやうなものがある。半透明のオリヅ色の玉で作られる。二個あるが同一器に屬してゐたものと考へられる。突出部の型式は圖20下の器と同様である。そこに刻された渦紋は二里頭期に特徴的なものである。このやうな紋様を刻した器の完形品は今の所知られてゐない。

(7) 早期巴人文化

廣漢の中興公社遺蹟出土の玉器中に圖23のやうな琮が知られる。この遺蹟と文化については先に解説を加へたことがある。

るので詳細はそれにゆづる。年代は大體文化中心地域の二里頭文化平行頃のものである。方柱部の面がやや中高で、前引の良渚文化の琮の分類でいへばAⅣ位の感じである。方柱の稜の上下端に近い所は圓味がつけられてゐて二里頭のものに近いが、中程は稜角が立つてゐる。

(8) 殷 後 期

殷後期の早い時期に屬する殷墟婦好墓から出土した多數の玉器中に琮も幾つかある。その内龍山文化、二里頭文化のものには既に引いた。圖24は圓筒の四方に切妻の屋根形のを附けた型式のもの。同式の琮は安陽大司空村からも出てゐる(圖26)。圖27は同式の参考として引いた。褐綠色の玉で作られる。圖25は上下に出る圓筒部が長く、圓筒に作りつけられた突起の兩側の際にくつきりと溝が彫られるなど、作行きに相違があるが、今の所類例が他にないので便宜上ここに入



圖26 殷後期 琮 安陽大司空村出土 高 3.3 cm

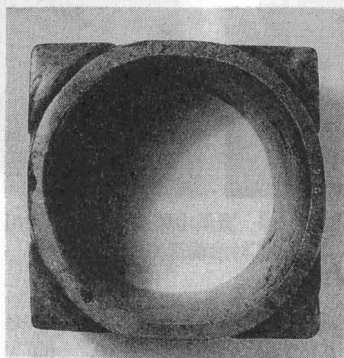


圖27 殷後期 琮 出土地不明
Courtesy of the Royal
Ontario Museum, To-
ronto 高 7.7~7.8 cm

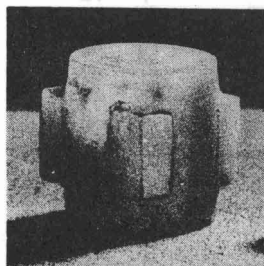


圖24 殷後期 琮 安陽小屯婦好墓出土 高 2 cm



圖25 殷後期 琮 安陽小屯婦好墓出土 高 10.4 cm

對蹠的に犧首が
つて頭の上を琮
の小口に向け、
せ見ることによ
悪い。兩者を併
できるが保存が
形を知ることが
ある。圖28は全
29は犧首の保存
が良いが斷片で
石製である。圖
斑の入った大理
それが二層にな
つた類。灰色の
に犧首が彫られ
屋根の形の突起
の外に附く切妻
圖28 29は圓筒

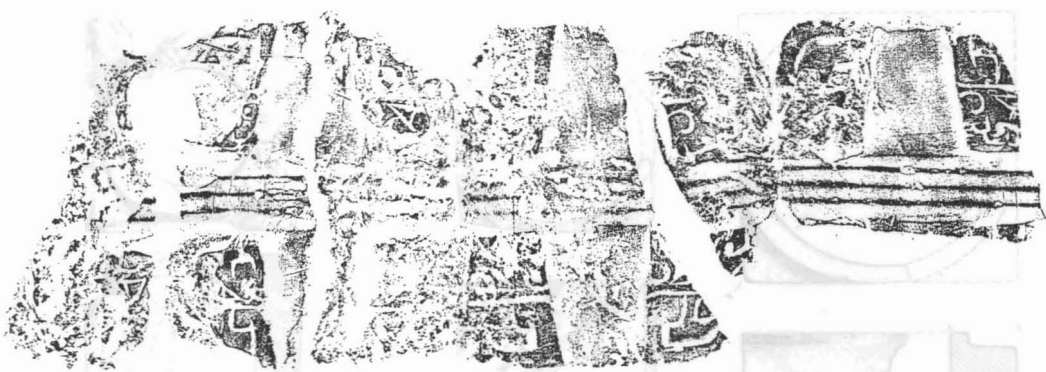


圖28 殷後期 琮 出土地不明 測圖1/3

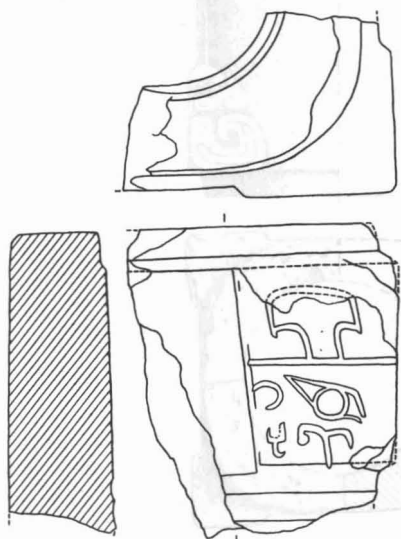
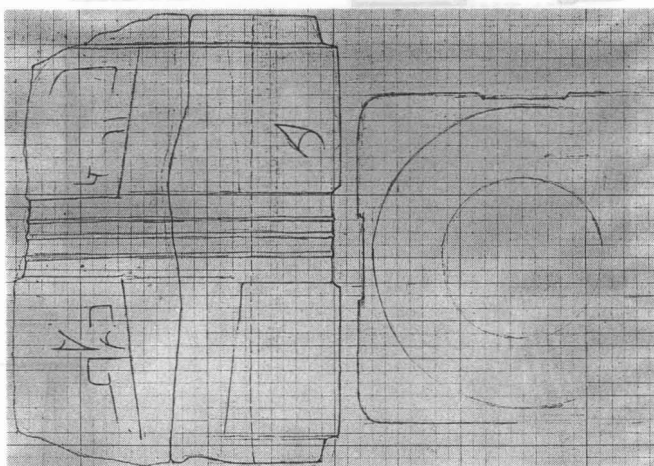


圖29 殷後期 琮 出土地不明 測圖2/5

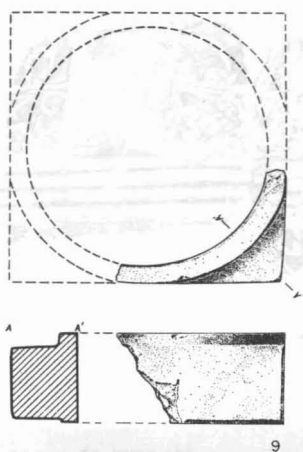


圖32 殷後期 琮 安陽侯家莊出土 圖1/2

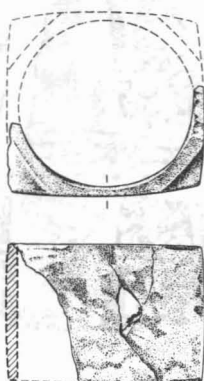


圖30 殷後期 琮 安陽侯家莊出土 1/3

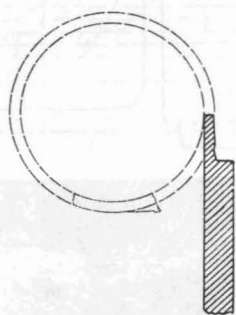
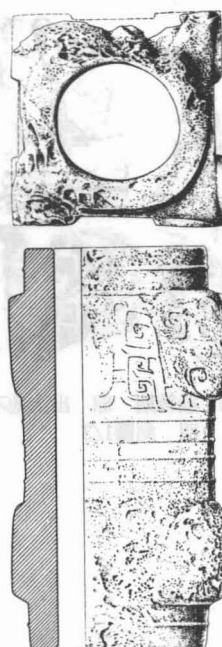


圖33 殷後期 琮 安陽侯家莊出土 1/2



圖34 殷後期 琮 安陽小屯婦好墓出土 高 4.9 cm

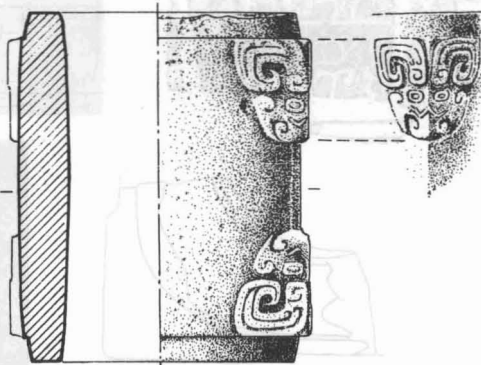
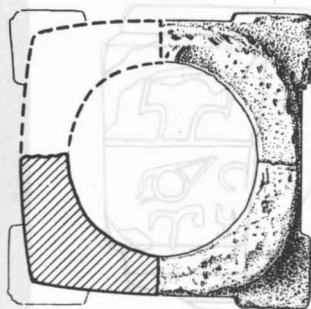


圖31 殷後期 琮 安陽侯家莊出土 1/3



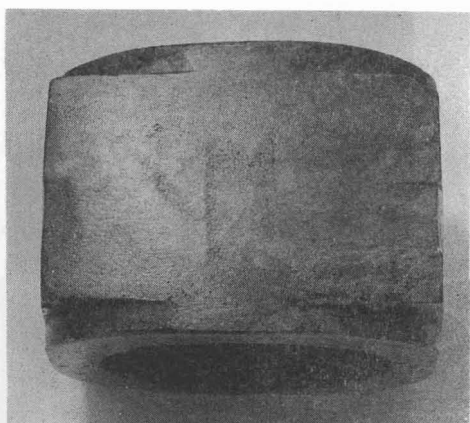


圖38 良渚文化 琮再利用品 出土地不明 Courtesy of the Harvard University Art Museums (Arthur M. Sackler Museum) Bequest-Grenville L. Winthrop 高 5 cm

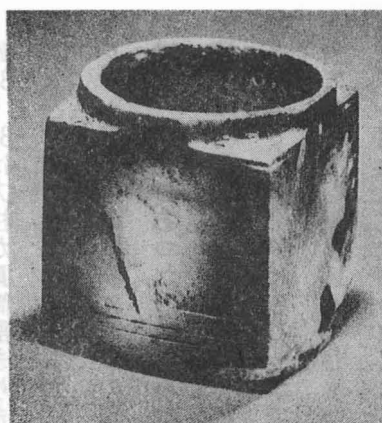


圖35 殷後期 琮 安陽小屯婦好墓出土 高 6.5 cm

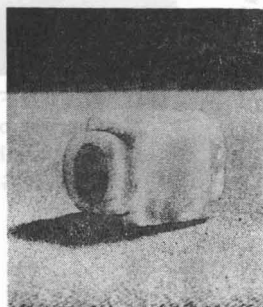


圖39 殷後期を下限とする琮 安陽小屯婦好墓出土
左高 2.8 cm 右高 1.7 cm

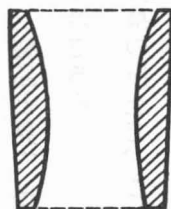
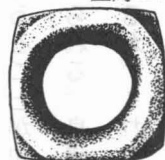


圖40 殷後期を下限とする琮 出土地不明 Courtesy of the Harvard University Art Museums (Arthur M. Sackler Museum) Bequest-Grenville L. Winthrop 高 14.5 cm

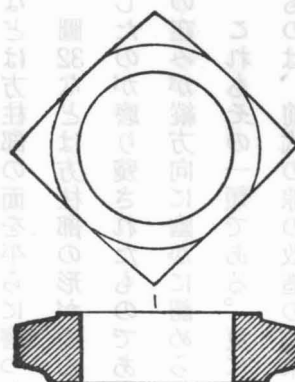


圖36 殷後期 琮 益都蘇埠屯出土 1/2

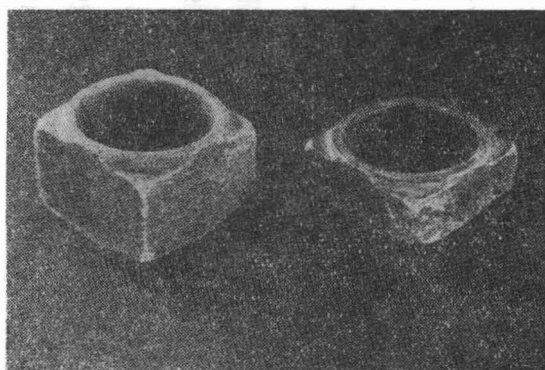


圖37 殷後期 琮 保德林遮裕公社出土
左高 5.3 cm 右高 3.3 cm

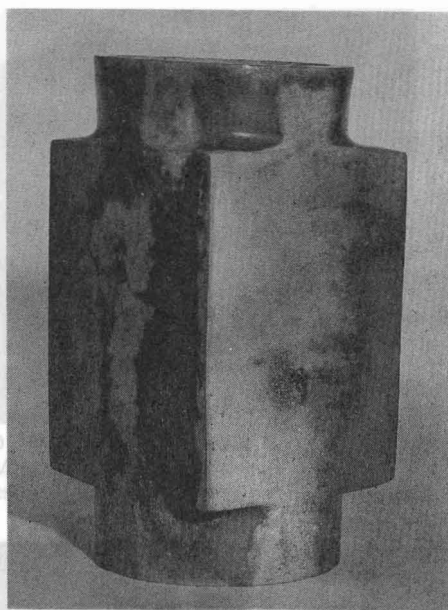


圖41 殷後期を下限とする琮 出土地不明
Courtesy of the Harvard Art Museums (Arthur M. Sackler Museum)
Bequest-Grenville L. Winthrop 高
14.5cm

彫られてゐることが知られる。この頭の方角に殷後期の特色が認められる。良渚文化の場合には同方向に重ねられてゐたのであるが。これらの器は彫られた犧首の様式によつて殷後期と判定される。圖24、26はこれらの紋様によつて年代の判定できる類と對應する玉製品と見て（古物ではなく）殷後期のものとして扱つたのである。

圖30、31は安陽侯家莊の大墓の出土で、これも大理石製である。圖28、29では犧首は圓筒の外に作り出された切妻の屋根形の上に線刻されてゐたが、ここではそれが丸彫にされてゐる。頭の方角は圖28、29と同方式である。測圖が正しいとすると圖31の方は孔が兩口に向つて擴がる作りになつてゐる。

圖32—36は方柱が圓筒部ぎりぎりに外切、乃至方柱の細工が圓筒に食ひ込む類。いずれも低い類で、紋様は刻まれない。圖34などは整つた作りであるが、圖35、37などは方柱部の面を平らに磨つた際、同筒部に喰ひ込んだもので、出土地不明のコレクション中の遺物にもこの類が多い。圖32などは方柱部の形が歪んでしまつてゐる。圖35は方柱部の面に水平の刻線が残る。紋様のあつたのを磨り消さうとしたのが磨り残されたものである。圖38も良渚文化の神面の鼻の上部の凹みが角に残り、方形の中央にも相隣る神面の間の窪みが縦方向に幽かに認められる。古い玉器の再利用といふことは何時の時代にも幾らでも例を擧げることができるが、これもその一類である。更に進んで、今問題の類に多い、方柱部の面の細工によつて圓筒部も磨り込んでしまつてゐるものは、前代の琮の改造の結果ではないかと筆者は疑つてゐる。良渚文化、陶寺類型、早期巴人文化等の琮には方柱部の面が中高に作られた型式、隅角に圓味を持たせた型式があつたが、これを圖34に示したやうな、方柱の面が平らで隅角に稜の立つた形に改造しようとするれば、どうしても面の中央部、圓筒に切してゐる

部分を多く磨り減さねばならず、圓筒部まで磨り込んでしまふ結果になると考へられる。多少の細工の不手際といふものはありうるが、かくも多くの琮で圓筒部まで喰ひ込んで磨り減してゐるについては、右に記したやうなことも想定せざるをえないのではなからうか。その證據を示すことのできる遺物は前引の他滅多にないのではあるが²⁹。然し異文化に屬する玉器に亂暴な加工を加へて原物の美を臺なしにして再利用した事例は他にも想起することができよう。先に筆者が記した石廬丁形玉器や骨鏟形玉器を二枚（またはそれ以上）にスライスした事例³⁰、二里頭文化の魚尾付龍形玉器の頭をもうで使用了事例等である。

殷墟出土の琮には更にもう一種類がある。圖39は婦好墓出土、圖40は侯家莊一〇〇四號墓出土のもので、いずれもミニチュアチャーである。これらの模された原型といふと、コレクション中によく見かける、圖41のやうな類が想起される。この類はいづれも半透明の、大ぶりの玉理の入った玉材が使はれ、圓筒部と方柱部の境界の細工が大まかなのが普通である。この類は方柱部の一端が他端より少し太く、太い側に接する圓筒部の基部が内に磨り込まれ、稜を正面に見るとこの圓筒部が上擴がり氣味であり、反對側にはこのやうな細工が施されない、といふ特徴を持つ。圖40には方柱部の上が少し太くなる特徴が認められ、上部の圓筒部の基部が内に向つて磨り込まれた様も測圖から窺はれる。圖39左の琮の圓筒部にも同様な特徴が見られる。方柱部は上下同じ太さであるが。以上圖39左40が圖41のごとき類を寫したものであることはほぼ疑ひないと思はれる。

圖41のやうな琮は現在のところ、學術發掘による出土例が知られない。従つて圖39左40のやうな殷後期の墓からの出土品が、墓と同時代のものか、或いは時代の遡る遺品がその時代になつて埋葬されたものであるのか決めることができない。方柱部の面を磨る際に圓筒部まで磨り込んでしまつてゐる特徴が圖32以下のものと共通するのでここに一緒に扱つた。上擴がりの方柱部、上擴がりに見えるやうに細工した上部の圓筒部の特色は良渚文化の琮と共通するのではあるが。とはいへ、圖41の類は良渚文化のものと使はれる玉材の質において明かな相違があり、後者を再加工したものでないことは明ら



圖42 西周中期 琮 長安花園村出土 高6.2cm



圖43 西周中期 琮 濟陽劉臺子出土 一邊3.2~3.6cm

かである。

(9) 西周

平らな方柱に圓筒を内切させた型式と思はれる。他に琮とされる玉器殘片が長安張家坡の住居址から報告されてゐるが、

「内圓外方」といふ以外に詳細は知られない。

(10) 春秋

圖44は洛陽中州路四號墓から出土したもの。この墓は東周第二期とされ、春秋中期に入る。方柱部と圓筒部の間に餘裕のある、特殊な形であるが、報告書には寸法以外に記述がない。圖45は鳳翔の出土で、圖45は單獨で、圖46は璧璜等と共に埋められてゐた。その邊に大型建築遺蹟があり、それに關係した祭祀に使はれたものと推測されてゐる。後者と伴出した玉飾には春秋中期位と見られる刻紋がある。これらの琮もその時分に埋められたと思はれる。圖45は半透明、青綠に黃白色の條紋があると記され、圖41の類を思はせる玉質であるが、形態には違ひがあるやうである。圖46の方は方柱部の面を磨ることによつて圓筒部の一部が磨り込まれてゐること、殷、西周の例圖3543等と同様であるが、方柱部の四隅の上面を磨る際にその部分に當る圓筒部の外側も直線的に削つてをり、その結果圓筒部の小口は上から見た形が八角形になつてゐる所に前代になかつた特徴が認められる。圖47にゾンネンシャイン・コレクション中の相似た例を引いておいた。

圖48は臨淄郎家莊一號墓の殉葬坑の出土品である。左は坑八、右は坑九のもので、明器である。他の種類のものと一緒に

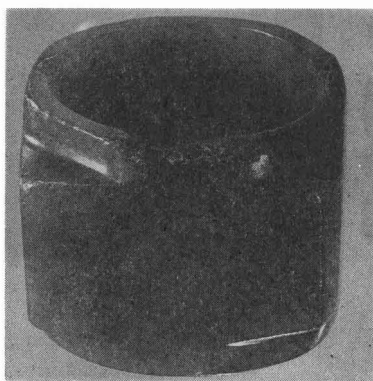


圖47 春秋中期 琮 出土地不明
The Edward and Louise
B. Sonnenschein 1950, 773
© 1987 The Art Institute
of Chicago. All Right Re-
served, 高約 3.9 cm



圖44 春秋中期 琮 洛陽中州路出土
一邊約 5 cm

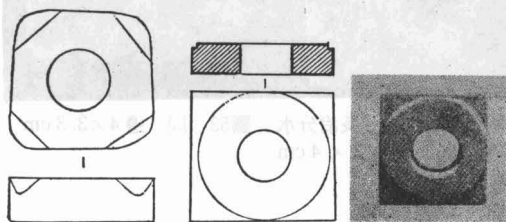


圖48 春秋後期 琮 臨淄郎家莊出土 測圖1/2

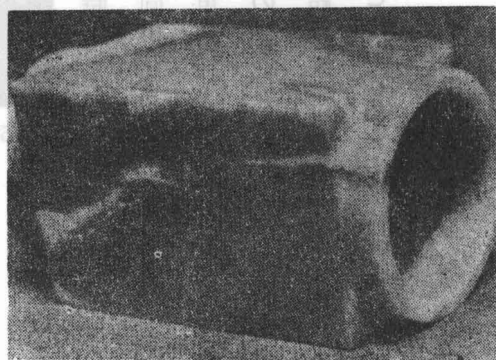


圖45 春秋中期 琮 鳳翔紙紡公社出土
高 12.7 cm

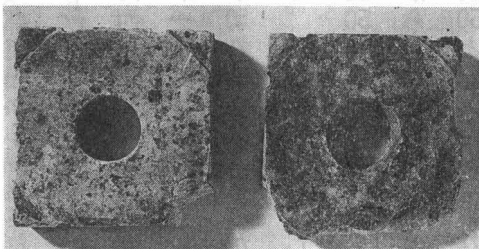


圖49 春秋後期 琮 出土地不明 東京大學教
養學部美術館 高 1 cm 左一邊 5 cm
右一邊 4.9 cm



圖46 春秋中期 琮 鳳翔紙
紡公社出土 高 3 cm



圖50 春秋後期 琮 出土地不明 Norton Gallery and School of Art, West Palm Beach 高約4.2 cm



圖51 春秋後期 琮 輝縣琉璃閣出土5/6

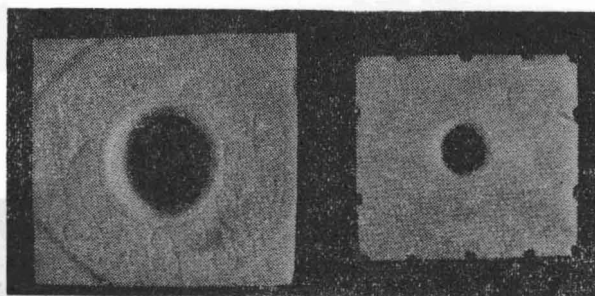


圖52 春秋後期 琮 長治分水嶺出土 邊4.2×4 cm 厚1.5 cm

圖53 同 邊4×3.3 cm

に頭部周邊から發見された。同出の陶製明器、佩玉等から春秋後期前半頃のものと思われる。琮を頭の邊に副葬した西周中期の例は前節に引いた。明器のためか、圓筒部が一侧にしか切り出されてゐない。圖49は兩側に圓筒部が切り出されてゐるが、相似た粗末な細工の小型品である。全體に白く風化してゐる。

圖50は出土地不明のものであるが方柱部の羽渦紋の細工から春秋後期前半頃のものと思われる。この式のもので圖50と似た羽紋の彫りを加へた上等品がサックラー・コレクション中にある。寫眞を注文してあるが未着。圖51は琮を平たくした形の佩玉。この類の内の古い例であ

る。器の紋様は圖50のものと同じ手で、同じ時代のものである。

圖52は長治分水嶺一二六號墓の出土品。同出の青銅器は春秋後期後半のものである。圖52は四・二×四cmで厚さ一・五cm、兩面とも方形の四隅を直線で切つて八角形を切り出し、一面と側面に羽紋を刻する。圖50のやうなものの便化したものである。八角形を切り出すのは圖4647のやうなものの傳統である。圖53は四×三・三cmであるが、厚さの記述がない。一面と側面に羽紋を刻むといふ。四邊に駟牙飾を刻む。この時分から他の種類の佩玉類にもよく使はれ出す裝飾の一種である。『周禮』玉人に記される大琮がこの型式のものと考へられてゐた(圖62)ことは以前に筆者の記した通りである。

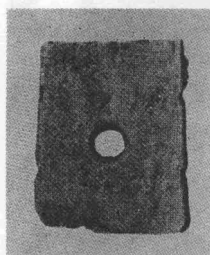


圖55 戰國前期 琮 輝縣趙固村出土 邊1.4×3 cm 厚1.4 cm



圖54 戰國前期 琮 汲縣山彪鎮出土
左高 2.9 cm 右上 寸法不明
右下 邊 4×3.8 cm 厚 0.8 cm

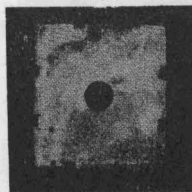
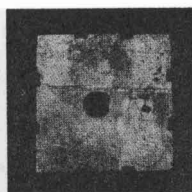


圖54 55は戰國前期前半、圖56—58は同後半の遺物と同出してゐる。圖54左は一面のみに圓筒部を作り出してゐる。圖54右、圖55 57は前の時期の圖53と同系統のもの。圖56は前の時期の羽紋を彫つた厚手の圖52の系統。後者の隅角を切つて八角形に作り出された圓筒部の名残もここでは失はれてゐる。圖58は同時代の作でなく、古物であつたかと疑はれる。圖46あたりと同じ作りだからである。圖59は燕下都の戰國墓の槨飾に使はれるスレート製の龍形飾と同質で、仕上げの施されない大量製産的な細工も似てゐる。同じ手のものと見られよう。燕下都の龍形飾は伴出陶製明器の壺の型式から前四世紀後半位に年代づけられる。

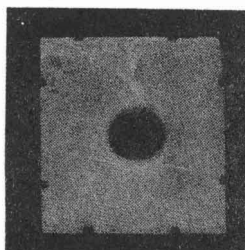


圖57 戰國前期 琮 長治分水嶺出土 一邊 4.5 cm 厚 1.8 cm

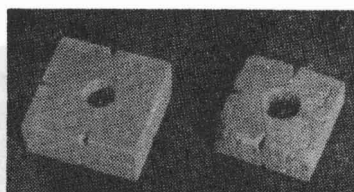


圖56 戰國前期 琮 汲縣潞河出土 寫真 左 一邊 3.8 cm, 高 1.7 cm

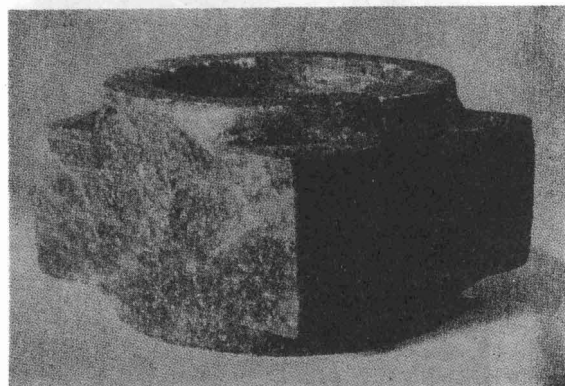


圖58 戰國前期墓出土 琮 長沙瀏城橋出土 高 5.2 cm

もの。下圖の寫真を見ると、この透し彫りの細工

の加へられる前の良渚文化の神面が残存してゐる。良渚の古玉を戰國時代に再利用したものである。

圖61は劍の玉製の珌などによく見る戰國の渦紋が彫られてゐる。

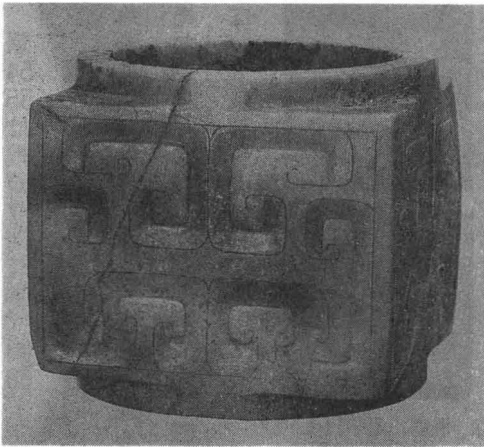


圖61 戰國中期 琮 Museum of Far Eastern Antiquities, Late King Gustaf VI Adolf Collection 高 6 cm

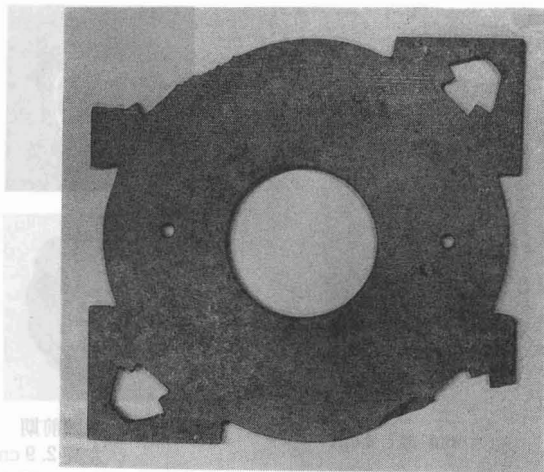


圖59 戰國中期 琮形飾 出土地不明 東京國立博物館 一邊 8.5 cm

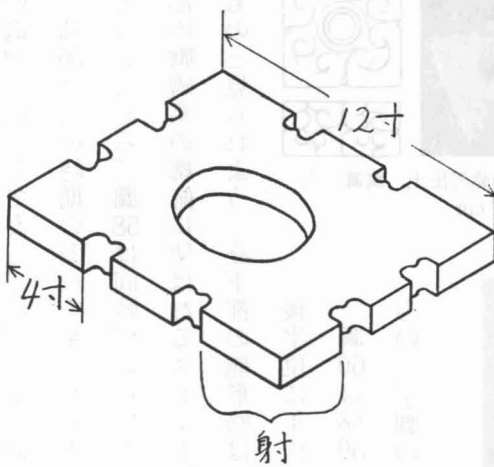


圖62 『周禮』玉人の大琮

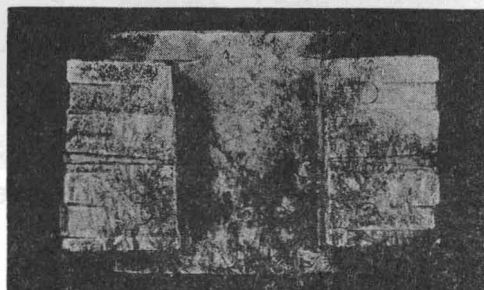
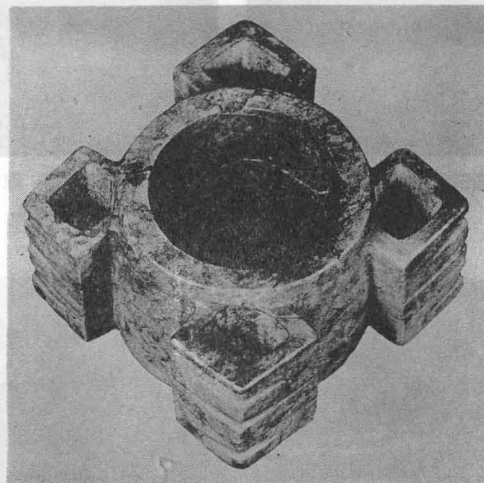


圖60 戰國中期 琮 S. Junkunc III Collection 高 4.6 cm

てこの細工の年代を知ることができる。

以上、現在知られる限りにおいて先史から戦国までの琮の遺物を見てきた。時代的にも地域的にも穴が澤山あいてゐるが、大凡の趨勢はこれによつて頭に入れることができたと考へる。

琮と共に古い璧は漢代でも盛ん

に作られ、使用がつづいてゐるが琮の方は戰國迄である。

三 琮は「圭」である

前章で見たやうに、方形の板の中央に孔を穿けた、『説文』に車軋に似る、と言ふのに對應するやうな形の琮は、戰國時代になつて出てくる最末期の型式である。³⁹ それ以前の琮は圓筒の四隅に切妻屋根の形の突出を加へたもの、乃至は方柱の中に圓筒を貫いたものといふ形をとつたものであつた。この形は漢時代に宗廟の「圭」について言はれる形に對應する。「圭」の形に關する記述としては後漢時代の經學者の間に傳へられたものが一番古い。例へば『春秋公羊傳』文公二年「丁丑作僖公主……」の條の何休の注である。

圭狀、正方穿中央、達四方、天子長尺三寸、諸侯長一尺

といふものである。⁴⁰ 「圭」の狀は正方にして中央を穿つ。四方に達するなり。天子は長さ尺三寸、諸侯は長さ一尺、といふのである。また『禮記』曲禮、下「告喪曰天王登假、措之廟、立之主曰帝」の條の孔疏に『五經異義』を引き

圭狀、正方穿中央、達四方、天子長尺二寸、諸侯長一尺

とある。天子の「圭」の長さに一寸の違いがあるが、あとは同様である。⁴¹ 正方形で中央に孔があげられてゐて、それで四方に達するもので、天子のものは長さが一尺二寸或いは一尺三寸、諸侯のものは長さが一尺、といふ説が後漢の經學者の間に踏襲されてゐたことが知られる。

これがどのやうなものを言はうとしてゐるのか考へてみるに、ここに先づ「正方形で眞中に孔が穿けられてゐる」と言ふから、正方形の中央に孔がある、と理解される。また後に「長さ一尺三寸」とか「一尺」といふ所から、先の正方形の一邊の長さは缺くとしても、全形は立方體ではなく細長いものはずで、従つて全形は正方柱狀と考へる他ない。正方柱

狀で正方形の中央に孔が穿けられてゐるとなると、これは長軸方向に孔が穿たれてゐるといふことになる。かういふ器物と言へばこれは琮そのものではないか。琮の形は正確には方柱の長軸沿ひに圓孔があるが、兩方の口には低い圓筒形が作り出されたもの、と言ふべきである。然してこれではくだけだしい。それを覚え易いやうに簡潔に言ひ表はすとなれば、後漢の經學者が口を揃へてくり返してゐるやうな表現にならう。

右に引いた漢代の經學者の「主」の形についての記述の中に「その形に作ることによつて四方に達する」と出てくるが、これはどうとるべきか。唐人は「主」に穿つた孔が四方に向つて通じてゐる、と取つた。唐の成伯璵の『禮記外傳』⁴²といふ本に、

天子廟主長一尺二寸、諸侯一尺、四向孔穴、午達相通

と、即ち天子の廟の「主」は長さ一尺二寸、諸侯のは一尺、四方に向つた孔が十字形に相ひ通じてゐる、といふごときである。⁴³これは前引の漢人の傳へる「主」の制に「四方に達す」とあるのを、孔についてのことと取つたからに相違ない。然し「正方にして中央を穿つ。四方に達するなり」とあるのに對し、正方形の中央に穿けた孔が四方に達するのだ、といふやうに取ることは始めから無理な話ではなからうか。ここは當然「四方に達する」とあるのは琮の四方形についてのことだと取るべきである。前言に引いた『周禮』大宗伯の黃琮について、鄭玄が「琮の八方は地を象る」と、即ち琮の「八方」形をしてゐるのは地を象るのだ、と言つてゐる、漢人の觀念で天は圓形であるに對し、地は方形のものであり、琮の八方形がこれに對應してゐるといふのである。この「八方」は琮を上から見た形について言つてゐることは疑ひない。⁴⁴然らば同じ漢代の經學者が琮について「四方に達する」と言つた時、これが琮を上から見た時の形の「正方」「四方」形について解説してゐるのであることについては何の問題もない所であらう。

以上、戰國よりも古い時代の琮が、漢時代に通行してゐた「主」の形についての有力な所傳⁴⁵と合致してゐることが明らかになつた。⁴⁶

漢代の經學者の間に傳へられた宗廟の「主」の制が玉器の琮と合致するとは言つても、宗廟の「主」は木で作られることになつてをり、一方琮は玉製が本來である。また「主」と合致する玉製の琮は前三千年紀末から殷後期頃までに例が多いが、西周から春秋戰國には衰退期に入つてゐる。これはどう説明すべきか。これは最後の章で考察が加へられるが、時代による禮制の變化と、それにもかかはらず存続した「主」の機能及びそれに結びついて保持された型の繼續性、といふことで説明されるであらう。

然しそれでは經典に出てくる木製の「主」はその名で呼ばれるのに對し、ここでその古い形と考へた琮はそれとは別にこの名で呼ばれてゐるのはどう解すべきか。これについては宗廟の「主」がまた宗の名で呼ばれる事實が注目される。

『周禮』春官、肆師に

凡師甸、用牲于社宗、則爲位

と、即ち、凡そ師、甸に牲を社、宗に用ふれば、則ち位を爲る、とあるのに對し鄭玄は

社、軍社、宗、遷主也

と、即ち社は軍社、宗は遷主なり、といふ、遷主とは世代が降つて古くなつた結果各自の廟から遷され、祧廟に納められた「主」のことである。戦争や狩獵に際して社の「主」と共に車に載せて携行され、到着地で夫々臨時の社と祖廟の「主」としての役割を果すものである。何故もつと世代の近い父祖のものを持つて行かず、遷主などを持つてゆくのかもう一つ納得がゆかないが、兎も角遷主といふ限定されたものであるにせよ、「主」が宗の名で呼ばれたことになつてゐるのは興味深い。「主」即ち琮は古く玉で作られるのが本來であつたから、それを指す文字としては玉扁をつけて琮と呼ばれた、と解することができるからである。後世の「主」の役割を持つてゐた琮といふ玉器は時代、王朝の移り變りと共に宗廟の「主」としての用途から分化し、漢代の「主」についての寸法の所傳に残るやうな丈の高いものは作られなくなり、春秋末から戰國にかけて方板狀のものに變り、漢代にはそれも消滅する。一方「主」はいつの頃からか不明であるが木製のも

のが主流となり、その名稱も變つたが古い琮の型式は保存し續けた。そしてそれが玉製であつた時代に始まる型式と寸法についての規定が學者の間に傳へられて漢に至り、古い宗（琮）の名も遷廟の「主」の呼び名として古典の中に僅かに保存されてゐた、といふことになる。

以上前三千年紀末から二千年紀に多く作られた琮が、「主」の古い形であることを證した。「主」はまた祐とも呼ばれた。『説文』六部に

主、宗廟主祐也

とある。『繫傳』のテキストには「主、宗廟主石也」と祐を石に作る⁴⁹。然し『説文』には示部に「祐、宗廟主也……」とあり、段玉裁は轉注だと思つてゐるから祐とした方が正しい。さうすると『説文』の主の説解は「宗廟主」と祐とを同格に取り、「主は宗廟の主である祐である」と讀むべきことになる。

然し『説文』の祐の説解には未だ先があつて少々説明を要する。即ち『説文』には前引につづいて周禮有郊宗石室、一曰、大夫以石爲主

と記す。先づ前の句。周禮とあるが、今の『周禮』といふ書物にはこの句はなく、注釋家は周代の禮の意味に解してゐる。郊、宗（どちらも祭祀の名）の石室があるといふのについては當の許慎の『五經異義』⁵⁰に

春秋左氏傳曰、徙主石於周廟、言宗廟有郊宗石室、所以藏栗主也……

といふ。ここに引かれる『左氏傳』は昭公一八年の條で、今のテキストには

使祝史徙主祐於周廟

とあり、主石が主祐となつてゐる。さうすると許慎は郊、宗の石室があつて中に栗の木製の練主が藏されてをり、その石室が祐だ、と考へてゐる如くにとれる。晉の杜預はそのやうに理解して『左傳』の今の條の注に

祐、廟主石函

と、即ち祔は廟の「主」の石函だ、と記す。然しこれは同じ許慎の『説文』にはつきりと祔は宗廟の主だと書いてあるのと喰ひ違ふことになる。これはさう取るべきではないのである。

『説文』の祔の説解に前引の「周禮有郊宗石室云々」が附記されてゐるのは、祔の字が石に从ふことの説明なのであるが、その後半の方は明かに自分是不賛成であるが参考のために引いたものである。『五經異義』に

謹按、大夫以石爲主、禮無明文、大夫士無昭穆、不得有主、今山陽民俗、祀有石主

と、即ち、謹んで按ずるに、大夫の石を以つて主を作ること、禮に明文なし。大夫、士に昭穆なく、主を有するを得ず。今山陽の民の俗に、祀るに石主あり、と大夫が石で「主」を作することを否定してゐるからである。

然らばその前の「周禮有郊宗石室」の方は祔が石に従ふ理由として肯定的に引いたものと考へねばならない。とすると祔字の説解に始めにそれが宗廟の「主」だと言ひ、次にこれを引くのであるから前引『五經異義』を参照すると、木製の「主」を容れるものとして石室があるから、木主を指す祔の字は石に従ふ、といふ趣旨であつたと考へる他ない。

『五經異義』に引かれた『左傳』には、今のテキストで主祔とある祔の字が石となつてゐる。この『五經異義』の文字が昔のままとすれば、許慎の見た『左傳』には祔とあつては都會の悪い所を、幸ひ石となつてをり、許慎のやうな解釋が可能であつたのである。

『説文』に祔を「主」だと解する説は、右のやうに別に矛盾ないものとして理解されるのであるが、然し祔を「主」を納める石函だとする杜預のやうな解釋とどちらが良いかについては、また別に検討する必要がある。桂馥は『説文解字義證』の祔字の條に許慎の言ふ「郊宗石室」の室は讀むこと「鞞は刀室なり」の室のごとし、といふ^①。鞞は刀のさや、「主」より一まはりだけ大きいケース、と解したものである。然しケースにせよ、長さ二、三十cmの木主を入れる石製品となると、相當な嵩と目方のものとならう。この點について吳玉搢は『説文引經考』に『左傳』哀公十六年の孔悝出奔の話を引き、即ち、孔悝が貳車をして祔を西園にとりに返させたのを、子伯季子が追ひかけ、祔を載せた者に出遇つてこれを殺し、

その車に乗つて行つたが、祐を迎えに來た許公爲に殺され、その車の中の橐中から祐が見附かつた、とある話である。吳氏はこの話から石室や石函は橐中に入るものではない、と考へた。⁵²確かにさうである。第一「主」を入れる石函をとり返らせたのでは話がおかしい。この祐も説文にいふ宗廟の「主」の意味の祐でなければならない。かうみると、祐を「主」の容れ物とする説には分がないやうである。⁵³

この方は後出の説でもあるし、さておくとして、『左傳』の昭公十八年の前引の條は、許慎の見たテキストに「主石」とあつて、前引『五經異義』に記されるやうな解釋が行はれたことは確かであらう。然しこの「主石」は今のテキストのやうに「主祐」とある方が解釋が簡單だつたはずである。『説文』宝字の說解に「宝は宗廟の宝祐（主である祐）なり、と主（主）である祐といふ語がちやんとあるからである。

四 琮——「主」の機能

前章で記したやうに琮が「主」であつたとすると、次にこのやうな方柱の中に圓孔を穿つた器物が「主」として如何様に機能し得たかについての説明が要求されることにならう。この問題を考へる上に參考になるのは士の禮で木主に代るものとして使はれるとされる苴である。『五經異義』⁵⁴に

今公羊說、卿大夫士非有土子民之君、不得禘祫、序昭穆、故無木主、大夫束帛依神、士結茅爲叢

と、即ち今の公羊家の説では、卿大夫士は土地と人民を持たなければ禘、祫の祭祀を行ひ、父祖を昭穆に秩序づけることができない。故に木主はなく、大夫は帛を束して神を依らしめ、士は茅を結んで叢を爲り、同じ用に供する、といふのである。大夫が束帛をそのやうな用途にすることについては諸家に説がないやうであるが、士が茅を使ふことは『儀禮』士虞禮に出てくる。先づそれについて見てみよう。

虞は朝に死者を埋葬し、もどつてその日の日中に廟で行ふ祭りで、被葬者を安んずる（虞）ものとされる。尸が入つて来る前に茅を束ねたものである苴に對する祭りが行はれる。苴は最初西坵、即ち堂の西南隅の物を置く臺の上に置かれてゐるが、それについては、

苴判茅長五寸、束之實于簠、饌于西坵上

と、即ち苴は茅を長さ五寸に切り、束して簠に入れ、西坵の上に具へておく、とある。仕度が整ひ、參會者が入場し終るとこの苴は尸が坐り、祭祀の行はれる室内に移される。場所は死者の靈の憑る几の東（几の前になる）の席（敷物）の上で、東向に縦になるやうにするのである。⁵⁶ 次いで主人の命でこの苴に對して黍稷、膚、酒を祭る（その上に落す）禮が行はれる。⁵⁶ この條の注に鄭玄は次のやうに記す。即ち、

苴所以藉祭也、孝子始將納尸以事其親爲神、疑於其位、設苴以定之耳、或曰苴主道也、則特牲少牢當有主象、而無何乎と。意味は、苴は祭られた食物、酒を受けるために敷くものである。孝子は親を埋葬して歸り、始めて尸を呼んで親に事へて神としようとするのであるが、その位置について迷ひを懷くので、苴を設けてこれを定めるだけのことである。或る説では苴は「主」の先段階であるとする。さうなら特牲饋食禮、少牢饋食禮にも「主」を象るものがあるはずであるが、これがないのはどういふことか、といふことである。ここで或説にいふ苴は「主」の道だ、といふのは、『禮記』、檀弓下に重（人が死ぬと中庭に立てる柱）について「重は主の道なり」といふのと平行の言ひ方である。その注に「主」が作られない前には重でもつて死者の靈を憑らしめるものとし、埋葬が終つて虞祭をする時にはこれを埋め、「主」を作る、と解説してゐるやうに、本式のものが作られる前にその前段階のものとして使はれるのが道である。鄭玄の引く或説で苴が「主」の道だといふのは、苴は主が作られる前段階で、「主」の役を演ずるものだ、といふのである。然しそれなら次に本式の「主」が作られることになるが、さうすると虞祭より後に行はれる祖先祭祀に「主」が出てくるはずなのにそれがない。それはどういふことか、と反對してゐるのである。

一應もつともな如くであるが、よく考へるとどうもおかしい。鄭玄は祭祀を行ふ者がどこに祖先の靈が來るのかわからない、と言ふが、それには室内の席の上に几がちゃんと置いてある。苴が目印だけであるなら何もそれに祭ることもあるまい。そこに祖先の靈が宿ると思ふからこそそれに食物と酒を供するのだと考へるのが普通であらう。士虞禮の式次第を見て、参加者が揃ひ、飲食の仕度が出来ると先づ「神を饗する」ことが行はれる。これが先の苴に祭る行事である。終ると尸が入つて來てその餘で祭り、食ひ、次いで参加者がその餘を祭り、食ふ。この場合は地べたに直接祭り、苴のやうなものを使はれない。饗より後は隋、即ち肉の切れ端、食ひ残しを使つての行事である。即ちこの最初の苴の上に祭る饗は、鄭玄の考へたやうな軽い意味のものでは全くないことを認識する必要がある。今の條の賈疏に後の「記」の文に尸がない場合でも苴があつてそれに祭祀が行はれることを指摘してゐるのもここで参考にならう。

賈疏はまた鄭玄の指摘する特性、少牢に苴が出て來ないことにつき『周禮』司巫には常の祭祀に苴がある。天子諸侯は尊いので禮が完備してゐるからだ、と解してゐる。これは經學者の考へ方であるが、それとは別にこの司巫の記載は苴といふものを考へる上に良い資料となる。そこには次のやうに記される。

祭祀則共匱主及道布及菹館

と。即ち祭祀には匱主と道布と菹館を供する、と。匱は「主」の容器、道布は鄭玄によると神（祖先の靈魂）のために設ける布。菹については鄭玄は先の士虞禮を引いてそこに出てくる苴に當ててゐる。菹館の館は漢の筐のやうなもので、菹の容れ物と考へてゐる。ここに出てくる道布の使ひ方はよくわからないが、菹は「主」と共に司巫に扱はれるものである所から、當然神を憑らせる小道具であることが察せられる。この司巫の文は明かに鄭玄の士虞禮の苴に對する解釋に不利な材料である。

茅を束ねたものの上に酒を注いでそこに居ると想定される神を祭るといふ考へは、『周禮』天官、甸師の「祭祀共蕭茅」の注に引かれる鄭大夫の説に見える。

鄭大夫云、蕭字或爲茜^ソ、茜讀爲縮^ソ、束茅立之祭前、沃酒其上、酒滲下去、若神飲之、故謂之縮、縮浚也、故齊桓公責楚不貢苞茅、王祭不共、無以縮酒

と、即ち鄭大夫はいふ、蕭の字はまた茜とも書かれる。茜は縮の意味に讀む。茅を束ねて祭を行ふ者の前に立て、酒をその上に注ぐ。酒は滲みて下に入り、神が飲んでゐるが如くである。故にこれを縮と形容したのである。縮とは浚（こす）の意味である。故に齋の桓公は楚が苞茅を貢せず、王が祭に供することができず、酒を縮する術のないことを責めたのである（『左傳』僖公四年にある話）、といふのである。賈疏は鄭大夫が士虞禮の苴のことを意識してゐることに注意してゐる。士虞禮では苴の置き方について東向に縦にするとあるから、横に寝かせるものである。肉や黍稷の飯をその上に祭るのはこの方が具合が良からう。ここでは酒を注ぐことを考へて立ててゐるのである。同様な用法については『説文』酉部、茜字の説解にも記される。

茜、禮、祭束茅加於裸圭、而灌鬯酒、是爲茜、像神飲之也……（段注の本による）

と、即ち茜は禮（の一種の名稱）である。祭るに當つて束茅を裸圭に加へ、鬯酒を灌する、これを茜といふ。祖先の靈がこれを飲むが如くである……といふのである。束茅を裸圭に加へる、といふと兩者をどのやうに組合せるのか書いてないが、玉器と一緒にして使ふ所は興味深い。束茅に鬯酒が滲み通る所が、祖先の靈が酒を飲むが如くであるといふから、この酒を祿する對象である束茅には祖先の靈が憑つてゐると考へられてゐることは明かである。『説文』はこの先に前引鄭大夫の注にも引かれた『左傳』僖公四年の話を引く。そこには「無以茜酒」と現行の『左傳』のテキストに縮とある字が茜と書かれてゐる。『説文』の説解の意味でもつて『左傳』のここの所を解すると、酒を縮することができない、といふのではなく、祖先の靈を憑らせた茅の束に酒を注いで滲み通らせ、祖先の靈に酒を飲んでもらふといふ行事を行ふことができない、といふことになる。酒をこす位なら代用品が他にもあらうが、このやうな用法であつたが故に事は重大だつただ、と解される。

なほ先の甸師の蕭茅につき、鄭玄は右とは別に、蕭と茅の二つの植物と取り、蕭は祭祀の際に焼いて香りを上げるのに使ふ草であるカハラニンジン、茅は土虞禮に出て來た苴に使ふ茅で、また酒や甘酒を縮すにも使はれるもの、と注してゐる。鄭玄は茅で酒をこすといふが、茅を束ねたようなもので酒をこして糟を去ることが出来るであらうか。束ねた茅のやうなものでは、初めほんの少しは漉せても、すぐ目づまりして外にあふれるばかりになつてしまふはずである。釀した酒の容器にざるのやうなものを押し入れてしたませるか、または丈夫な袋に入れて強く壓しない限り、糟を去ることはできない。

以上土虞禮に使はれる茅を束ねたもの、苴が、鄭玄が考へるやうに祭られた食物や酒を受けるといふただけのものではなく、そこに祖先の靈を依らせたもの、「主」の役をするものであることが證されたと考へる。『儀禮』では苴を使ふ禮は限られてゐるが、『周禮』ではそれを供給する官として前引の甸師、司巫があつたが、『周禮』にはまたそれを扱ふ官として郷師がある。そこには

大祭祀、羞牛牲共茅菹

とある。ここにはそれを使ふ場合として大祭祀といひ、前引甸師、司巫には祭祀といふ。『左傳』僖公四年の前引の條にも「祭」とのみ言ふ。天子、諸侯の禮については苴の使はれるのは虞祭に限られることはない、といふ觀念があつたことが知られる。具體的な祭祀の種類は全く明かでないが。

以上、鄭玄の解釋に反對して、茅を束ねた苴が神を依らせるものであることの證明を行つたが、次に茅が他にも神を依らせる器物に使はれてをり、そのやうな力を持つものと信ぜられてゐたことを示し、以つて右の解釋の傍證としたい。

茅は旌旗の杆の先にも使はれる。これも同様神をそこに降すものとしての用法と考へられる。茅を使つた蕝といふものがある。『說文』艸部に

蕝、朝會束茅表位曰蕝……春秋國語曰、致茅蕝表坐

と、即ち繅とは天子が諸侯の朝會を行ふ時、茅を束ねたものでその立つべき位置の目印にするのを繅といふ。……『國語』に茅繅を致して坐を表す、といふごときである、と。引かれた『國語』は晉語八⁸。この繅は天子の朝會に際して位を表するのに使はれるといふから、『儀禮』勤禮に

上介皆奉其君之旂、置于宮、尙左……

と、即ち上介は皆その君の旂を奉じ、宮に置く、左を尙しとす……とあり、注に

置於宮者、建之、豫爲君見王之位

と、即ち宮に置くとはこれを立て、豫め君の王に見えるの位と爲すなり、といふ旂に當るもので、旌旗の一種として束茅は杆の上にとりつけたものでなければなるまい。杆頭に鳥の羽根を束にしたものをとりつけた旗は處と呼ばれ、『周禮』天官、夏采に

大喪……以乘車建綏、復于四郊

と、即ち天子が死んだ時、その乗車に綏を建てたもので四郊に魂を呼び返す儀禮を行ふ、といふ綏がこれに當る。これについては以前に詳細に論じたことがあるのでそれにゆづるが、屋根に上つて故人の衣を振る復の儀禮を考へ併せれば、復に使はれるこの綏の羽根の束には、死んだ天子の魂が憑つてくれることが期待されてゐたことは明かである。類推によつて旌旗の杆頭につけられた束茅にも、羽毛と同様な役割が推測される。

また茅旌といふものがある。『公羊傳』宣公十二年に、楚に敗れた鄭伯が降服するに當り、肉袒し、左に茅旌を執つて現れたが、それにつき何休は

茅旌祀宗廟所用、迎道神、指護祭者

と、即ち茅旌は宗廟を祀る時に用ゐるもので、祖先の靈を迎へ導き、祭者を指圖し、護るものだ、といふ。疏をみると、これは何休の時代の王朝の禮をもつて解釋してゐるのだといふ。茅を綴ちつけた長い紐のついた旗の一種が、漢時代その

やうな用法を持つたのは、先にみた苴や茅薙のやうな、茅の神を憑らせる力についての傳統の連續と解されよう。

祭祀用の器で鳥の羽毛と茅が互用される例としてまた羽葆の場合が想起される。『禮記』雜紀下に、

升正柩、諸侯……匠人執羽葆御柩、大夫之喪、其升正柩也……御柩以茅

と、即ち、これから葬らんとして棺を廟に入れるのに當り……匠人は羽葆、即ち鳥の羽毛を杆の先に束ね、四方に垂れるやうにしたものを執つて指圖し、大夫の場合はその用途に茅を用ゐる、といふのである。鳥の羽毛で作つた羽葆と同方式で羽毛の代りに茅を使つたものと考へられる。

なほ、右に見たやうに、鳥の羽根と同様な用法で束茅、茅が使はれてゐる所をみると、この茅は鳥の羽根に似たつばなを指すと考へるべきである。⁶⁷

以上大分と紙面を費したが、土の禮で木製の「主」の代りに使はれるとされる、茅（ちがやの穂、つばな）を束ねた苴といふものが、祖先の靈を憑らせるためのもので、茅を束ねたものは他にも旌旗の類に鳥の羽根と同様な形で使用され、やはり神をそこに宿らせるものであることを明らかにした。土の虞祭に使用される「主」である苴がそのやうなものであるとすると、木製の「主」や、その古い形であることを證した玉製の琮も、祭祀に當つてそこに祖先の靈を呼び出して宿らせる器物といふことになる。木主や玉琮に祖先の靈が宿るといへば、中央の孔をおいて他にあるまい。琮の孔の面は外から見えにくい部分であるにもかかはらず、大變な手をかけて丁寧な段差を除去し、磨き上げて光澤の出されてゐるのが普通であることに注意した。右のやうに見てくれば、それはそこが神の宿る小室であり、琮の中で一番大切な部分であつたからであると納得がゆかう。

魂の入る所といふなら、壺のやうに底があつても良ささうにも思はれる。然し琮の遺物で底の作り出されたものは皆無である。第一章で見たごとく、殷より古い琮の中には上の口縁と下の口の作りに相違のあるものがあるが、そのやうなも

のでも下に底を嵌めるための細工はない。⁶⁸そして大部分の琮は孔に上下の差のないのが通例である。⁶⁹古典に残る禮を見ると、祖先の祭祀に當つて香りの良い酒を地に注ぎ、アハヤキビ、腸間の脂を焼いて煙を上げる、といふやうに、靈魂は天からも、地中からも來る可能性があると考へられてゐたのである。この靈の宿る小室は、上下に向つて開いてゐる必要があつたのである。⁷⁰

五 社 の「主」

「主」につき、祖先の祭祀に使ふものについて見て來たが、他に社の「主」といふものがある。『周禮』小宗伯に
若大師、則帥有司而立軍社、奉主車

とある。軍隊を出動させる時は有司（大祝）を帥ゐて軍社を立て、遷廟の「主」を載せた車を帥ゐてゆく、といふのである。社の「主」は、行く先で社の前で賞罰の行事を行ふ必要があるから携行するのだとされる。その社の主について鄭玄は

社之主、蓋用石爲之

と、即ち、社の「主」は蓋し石をもつてこれを作る、といふ。賈疏は先に三一頁に引いた『五經異義』に漢時代山陽郡（山東省金鄉縣西北）の風俗で、祭祀に石主のあることを言ふのを引く。『周禮』の言ふ軍社の「主」は、石製にしても軍旅に携行するのであるから、大型の重いものではあるまい。恐らく祖廟の「主」の型式のものであらう。さうすると、「主」の原型である玉製の「主」が、石製品の形で殘存したものと解される。大理石をその時代に石と考へたかどうか知らないが、殷後期に大理石製の琮のあつたことは先に圖30 31に引いた通りである。⁷¹

祖先の祭祀に使用される「主」の古い形と考へられる琮の中央に通つた孔について、前章において祖先の靈が天からで

も地からでも出て来てそこに宿れるやうにさう作られてゐる、と解したが、社も天地の氣を通ずるものとされ、亡國の社はその上下に遮蔽を作つて天地と通じるのを禁ぜられるものだ、と言はれる。『禮記』郊特性に

天子大社、必受霜露風雨、以達天地之氣也

と、即ち天子の大社は必ず霜露風雨を受く、もつて天地の氣を達するなり、と。また『公羊傳』哀公四年の條に

六月辛丑蒲社災、蒲社者何、亡國之社也、社者封也、其言災者何、亡國之社、蓋擯其上而柴其下

と、即ち、六月辛丑に蒲の社が火事になつた。蒲社とは何かといふと滅亡した國の社である。社は盛り土である。それが火事になつたといふのはどういふことか。滅亡した國の社は上に屋根をかけ、下に木の小枝が敷いてある（それが燃えたのだ）、と言ふごとくである。蒲社は盛り土の型式の社であるが、ともかく社は天地にルートを持つものであると考へられてゐる。郊特性には社は天地の氣の通ふ所だといふが、實際にはもつと具體的に、社は天の神の地上における出張所的なものと考へられてゐたのである。よく知られるのは日食になると社で鼓を打つて牲を用ゐ、社に朱色の糸を張りめぐらせる行事である。社で行ふ行事の効力が即時天上の太陽に現れるのでなければ、日蝕のやうな緊急の異變に際し、そのやうなことを遙か離れた地上の社などで行ふわけはあるまい。社（の「主」）が、先に見た祖先の靈を天地から呼び寄せて宿らせる能力を具へた宗廟の「主」と同様、天上の神をそこに宿らせるものと信ぜられたことは疑ひあるまい。

社の「主」の性格は大筋右のやうなものとして、その「主」は前に見たやうに石で作るものがあり、またその本體が盛土であるものがあつた。またそこに樹を使ふと記されるものもあつた。前二者は同時代の遺物乃至圖像は稀であるに對し、樹のある社はそれが少なくなく、社の「主」の性格を研究する資料として使ふことができる。圖63は臨淄附近發見の碑の頭部で、表に「梧臺里石社碑」と書かれる。『水經注』淄水の條に記される後漢靈帝熹平五年建立の石社碑に當てられる。

裏面の畫像の様式はこの年代と矛盾しない。この畫像の方は碑の穿（下半分缺失する）の上に立つ大きな樹木が主題である。樹本の下右方に居るのは肱と腿に羽毛の生えた仙人であり、樹の左に居る普通の服裝をつけた人間に手を伸して物を

差出してゐる如くである。樹の頂に近い一對の枝の上には二羽の鳳凰がとまつて向ひ合ふ。この樹木は鳳凰、仙人といった天上の世界の住人と係りのあるもので、ただの樹ではあるまい。梧臺里石社の碑の裏側にある所から、この社の木と考へて良いのではなからうか。石社といふから社の「主」は先に見たやうな立方體とか琮形の石製品があると理窟が通り易いのであるが、後に見るやうに石社に木があつてもおかしくはないのである。

右の畫像には見えないが、社の樹木は、その根方の周圍を圍つたものがあつた。『韓非子』外儲説右上に見える社鼠の話に出てくるものである。

君亦見夫爲社者乎、樹木而塗之。鼠穿其間、掘穴託其中、燠之則恐焚木、灌之則恐塗阨、此社鼠之所以不得也。即ち、わが君は社をつくる者を見られたでせうか。木を樹ゑてこれを泥で塗ります。鼠が木と泥の隙間に孔をあけてもぐり込み、穴を掘つてその中に居ます。これを燠さうとすると木を焼きはしないかとの恐れがあり、水攻めにしようとすると、泥がくづれは



圖63 梧臺里石社碑 臨淄附近

しないかとの恐れがあります。これが社の鼠の捕へられない所以です、といふ。ここで言はれてゐる泥で塗つた樹木の社はどのやうな形態であらうか。泥の中に穴を掘つて鼠が住みつくといふのだから、

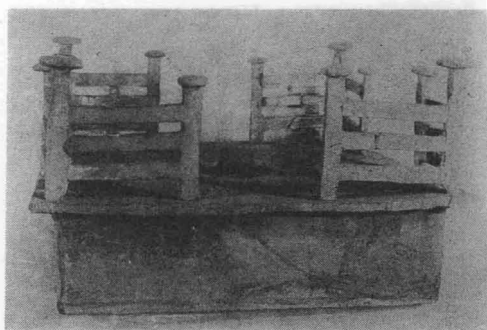
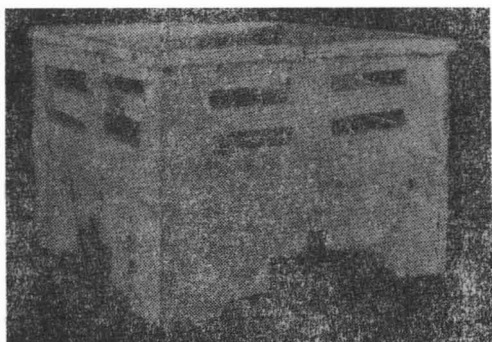


圖64 後漢 社明器 遼陽徐往子出土 方 24.7 cm

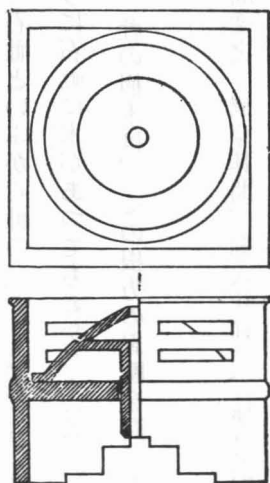


圖66 後漢 社明器 勉縣老道寺公社出土
測圖3/25

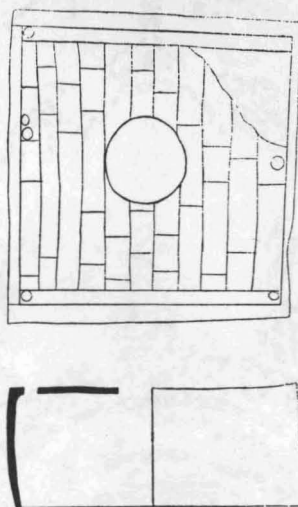


圖65 後漢 社明器 遼陽徐往子出土 3/25

この泥は木舞に泥を塗った日本式の家屋の泥壁程度の厚さのものではあり得ない。何十cm以上の分厚い塊状のものに相違ない。木と泥が密着してゐては、風で木が揺れた時に泥にひびが入るから、少少隙間があけてあつたはずである。この隙間に乗じて鼠が入り込んだと思はれる。そこに鼠が住みついて何故悪いか。また悪いのなら何故塗った泥を一度つぶして作りなほさないのか。それはこの塊状の泥が社の本體で、神の住家だつたからである。燻すとか水を注ぐとか、非破壊の方策があれこれ考へられたのはそのためと考へる他ない。

戦争中の遼陽の後漢墓の發掘品で圖 64 65 のやうな遺物が知られてゐる。圖 64 は方八寸二分、高さ二寸の箱狀の作りで中央に孔があり、周圍には柵を設ける。駒井氏は土壇のやうであると考へ、相似た遺物、圖 65 の方は上面に埴敷きのやうな線が引かれる

所から、土壇で中央の圓い部分は塼を敷かず土になつてゐるものと考へた。そしてこれを土を封じた社と考へられなくもないが、國や里の社に當るものは家では中霤と言はれた所から、これを中霤を象つたものとした。その場合、五祀の中の戸、竈、門、井などが漢墓の明器中にあり、五祀の一つの中霤も明器の中にあるのにふさはしいといふ考へも入つてゐるのである。⁶⁵ 思ふに、圖64 65の中央の孔は壇の土の露れた所でなく、社の樹の立てられる孔と見るべきである。また駒井氏は五祀の中霤を社と同様、特別の宗教的建造物と考へたのであるが、これは誤りである。戸、竈、門等と並ぶ、家邸の中の一つの施設の名で、そこで祭祀が行はれたといふだけのものである。⁶⁶

圖64と近い性格のものと思はれる遺物は勉縣からも發見されてゐる（圖66）。後漢中期の墓と考へられてゐる。⁶⁷ 方形の臺の中央に低い饅頭形のものが作り出されてゐる。この墓は未擾亂であつたが、四合院の明器の西北側に置かれてゐた所から、その附屬的なものと解説されてゐる。⁶⁸ この遺物の西南に接して水田の明器が置かれてゐた。⁶⁹ この遺物はむしろこの方に關係のあるもので『周禮』大司徒に田主といふものと見られる。即ち

制其畿疆而溝封之、設其社稷之壇而樹之田主、各以其野之所宜木、遂以名其社與其野

と、即ち、大司徒は王の都から千里以内に各行政單位の境界を作り、溝と饅頭形の盛土で目印とする。そして夫々の行政区劃毎に土地の神と穀物の神を祀るための壇（土壇と垣⁷⁰）を作り、土地と穀物の神の憑る「主」を樹ゑる。「主」は各々その土地に合つた種類の木をもつてし、その樹の名でその社と土地の名とする、といふのである。圖64—66に見るやうな小ぢんまりとした社は、王とか諸侯の社でなく、これらの墓の主人が自分の所有地に保有してゐた社と見た方が良いであらう。なほ、圖66の方は圖64のものと比べ、孔が細い。或いはここに木を植ゑるのではなく、切つた木を樹てる型式のもこの模型かも知れない。

ここに社の模型と考へ、中央に木が立つと見た圖64 65の遺物には上に垣がある。⁷¹ 垣の中に木の立つ圖像は前漢末後漢初の墓に使はれた塼のスタンブ紋によく見られるものである。圖67の木は斜交する矢來に圍まれ、左右に蓋^{キスガサ}が立てられてゐる。



圖69 前漢末～後漢初 社の墓
埴スタンプ紋 出土地不明 2/3



圖68 前漢末～後漢初 社の墓
埴スタンプ紋 鄭州出土 2/3



圖67 前漢末～後漢初 社の墓
埴スタンプ紋 鄭州出土 2/3



圖72 前漢末～後漢初 社の墓
埴スタンプ紋 出土地不明 2/3



圖71 前漢末～後漢初 社の墓
埴スタンプ紋 出土地不明 2/3



圖70 後漢 社の壁畫 和林格爾
埴墓後室北壁

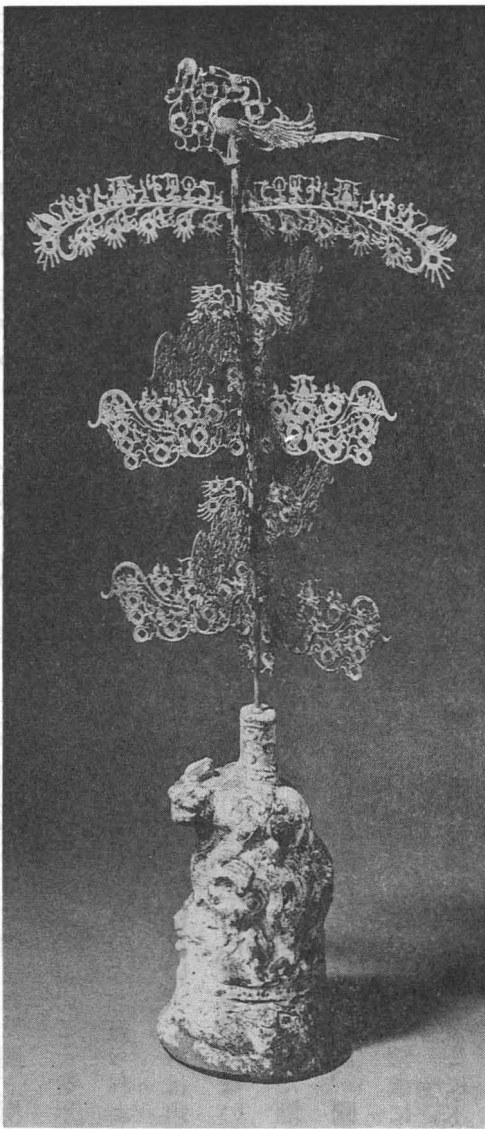
る。圖68も木の下に粗い斜線がある。これも垣と見られる。木の左右に立つのは蓋を二ツ重ねた形と見られ、幢と呼ばれたものと思はれる。これは旌旗の一種であり、貴人の使用するものであつた。ここがただの

立木でなく、神の宿る所であることを示すものと解される。圖69では垣に圍まれた獨立樹の左右に闕が立つ。闕は宮殿や官廳、邸宅等の入口に作られるものである。幢と同様、この木がただの木でないことを示すものである。和林格爾壁畫墓中の圖70の「立官桂□」と標題の記される木も下に雙闕があり、同じ性格の木と見られよう。圖71も似た圖柄であるが、中央の木の下部にはコ乃至ヨ字を横にした形の低いものがあるだけで垣はない。これは角張つてゐる點から地上に露出した木の根と見ることはできない。低い垣と考へられよう。圖72の木は左右に幢や闕はないが、根かたに粗い平行線が引かれ、その中にこの樹が立つてゐる。この平行線は先に駒井氏によつて塼敷きと解された圖65の明器を思ひ起させる。

圖67—69の圖像では垣の中の木の下が土壇になつてゐるか確かめられないが、圖71を參考することにより、恐らく垣があつたと推定することができる。さうすると、圖64—66の明器と圖67—70の圖像により、木の立つた漢代の社の型式を知ることができることになつた。方形の高くない土壇の中央に圓孔があり、そこに木が立つ、といふ基本型である。ここで土で作つた壇に注目すると、方形の厚い板狀、菓子^①の金鐐狀の土の塊の中央に圓孔をあけたもの、といふことになる。これは高低様々な變化はあるにせよ、方柱の中央に圓孔をあけた祖先祭祀用の「主」と同形といふことである。これで社の「主」も宗廟の「主」も、同じ「主」の名で呼ばれた所以が納得されるであらう。

土製の社の壇は中央の木を立てるための附隨的な施設に過ぎないのではないか、といふ反論が豫想される。それについては、先に『韓非子』の社鼠の話^②を引いた際に考察した、社にとつて泥を塗り固めた部分が重要であつたとの推論を想起して欲しい。また社の土の部分についてはよく知られる次の物語も注意すべきである。即ち『逸周書』作雒解に記される、周初に成王が諸侯を封建する時、國都に大社を作り、その壇（壇と垣）の東は青土、南は赤土、西は白土、北は驪土で、中央の空いた所は黃土をつめ、封建される諸侯の方角に對應した土を黃土に包んで授與し、諸侯はそれで各自の社の土盛りを作るのに使つた、といふ話である、^③ここには五色と五方の觀念が完成された形で反映され、周初の記録などではなく、戰國以後に形成された物語であることは明かである。然しこの物語は漢代の經學者の間に廣く信ぜられたものであ

るらしく、⁸⁵そこにあるのは、社の壇を作る土は、そこらの有り合せの土では不可で、特別な土でなければならない、といふ觀念である。⁸⁶この物語の場合、王の社から分けてもらつて來た大事な土を使つて諸侯が方形有孔の壇を成形するのである。さういふ貴重な材質で作つたものであるからこそ、鼠に穴をあけられて住みつかれたり、それを退除するのに水をかけてぐずぐずにしてしまつたりしては困るのである。何故そこがそれ程大切か。それは土で作つてあるとはいへ、祖先の宿る宗廟の「主」と同様、神が天上から、また地中から來て宿る場所だつたからに他ならない。靈魂の依る「主」が「德」にあふれた玉で⁸⁷作られた一琮一のと同様、社は王の社を構成してゐた、生産力にあふれた土で作られることが必須であつた、といふ觀念である。さう思つて前引の資料を見なほすと、『逸周書』作雒解など社を作る土にはうるさいのに對し、『周禮』大司徒の田主など、そこに立てる木は二の次で、その土地土地の適宜なもので良いなど軽く扱はれてゐるのである。



この社で神の宿る本體である土で作つた壇狀のものが壇の名で呼ばれてゐることは示唆に富む。先に引いたやうに死去した王の魂を呼びもどさうとする復の禮で、王の車に建てて城を廻る旌旗が綏（⁸⁸）で、この旌旗に王の魂が乗り移ることが期待されてゐるわけであるが、この⁸⁹綏はまた綏とも書かれ、この社の壇と同じ音で呼ばれたこと

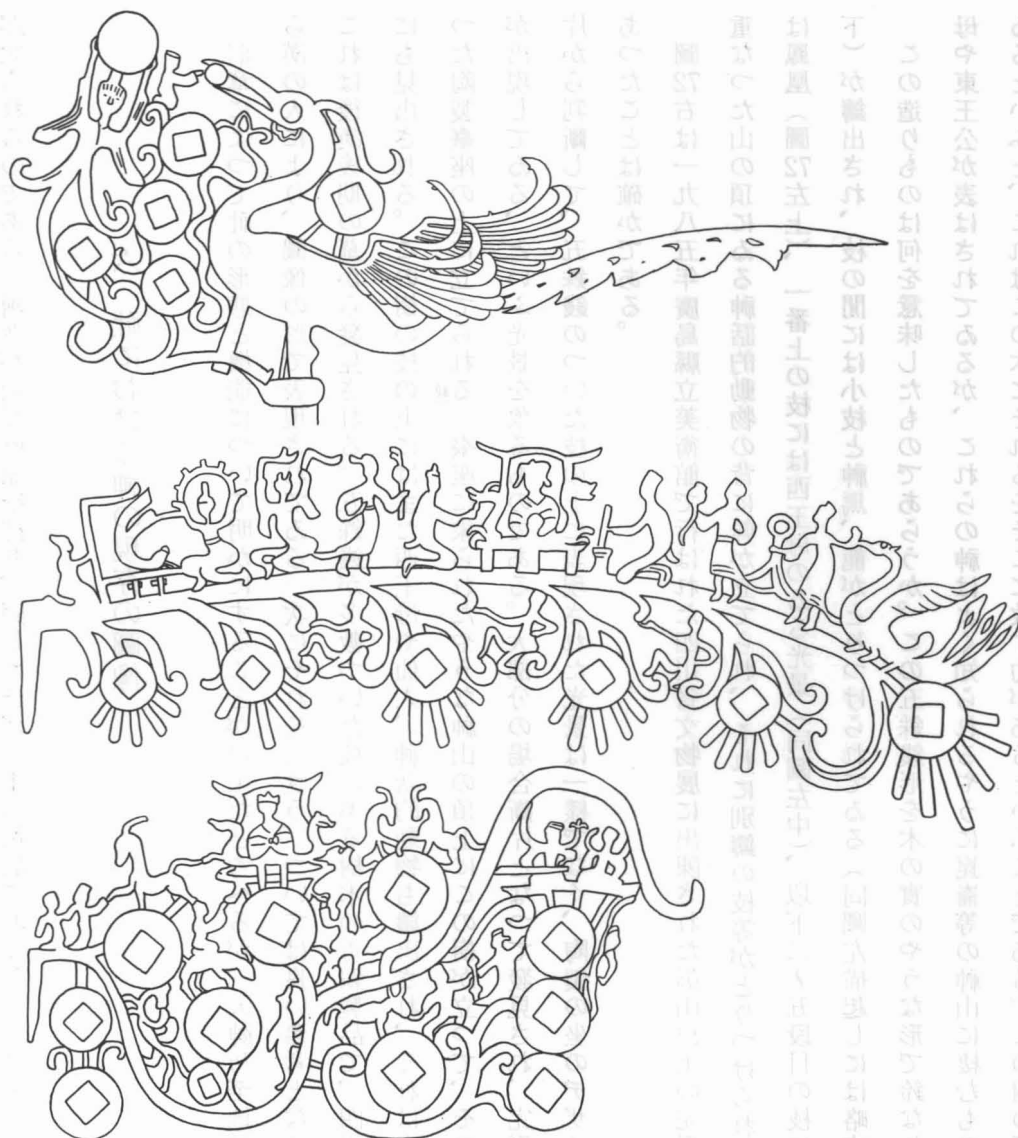


圖73 後漢 錢樹 彭山雙江出土 高130 cm



圖74 前漢 銜珠鳳凰紋の埴 興平茂陵東南出土

が知られるのである。兩者が同じ機能を持ち、同じカテゴリーの物品であつたことによると解される。

六 社における神の現存の圖像

前章によつて社の形態と機能について明かにすることが出来たと考へるが、天神乃至地神の社における現存は、戰國から漢の人により、圖像の形で表現されてゐる。次にそれを示さう。つては良い參考となるので、先づ所謂錢樹を引く。これは後漢後期の墓から發見される。五銖錢が多數ついた枝のある樹木の青銅製品で、四川省に多く、雲南、貴州、甘肅にも見出される。この樹の枝の上にはまた西王母や仙人、神話の動物も鑄出され、それはまた同様な創造物の棲む山を象つた陶製臺座の上に立てられる。臺座に象られたやうな神山の頂上にこの樹が立つて、その樹の枝の上にまた神話的存在が出現してゐる、といふ光景を象るものである。大部分の場合斷片となつて發見され、完形品は例外的にしかないが、斷片から判斷して、五銖錢のついた枝の上に表現された光景は一樣でなく、陶製の坐のデザインと同様、變化に富むものであつたことは確かである。

圖72右は一九八五年廣島縣立美術館で行はれた四川省文物展に出陳された彭山出土の完形品である。神話的動物の折り重なつた山の頂にゐる神話的動物の背に幹が立てられ、それに別鑄の枝等がとりつけられるといふ構造で、木の頂上には鳳凰（圖72左上）、一番上の枝には西王母のゐる光景（同圖左中）、以下二、五段目の枝には東王公のゐる光景（同圖左下）が鑄出され、枝の間には小枝と神馬、龍がとりつけられてゐる（同圖左描起しには略す）。

この造りものは何を意味したものであらうか。この五銖錢形を木の實のやうな形で鈴なりにつけた樹の枝の上に、西王母や東王公が表はされてゐるが、これらの神はよく知られるやうに崑崙等の神山に棲むものである。それがこの樹の上にあるといふと、これはこの木にそれらをそこに致す力があるといふことである。この樹の頂上に立つ鳳凰の左方には圓い



圖75 後漢 珠を授受する鳳凰の畫像石 嘉祥武氏左石室



圖76 後漢 珠を授受する鳳凰の畫像石 益都縣出土

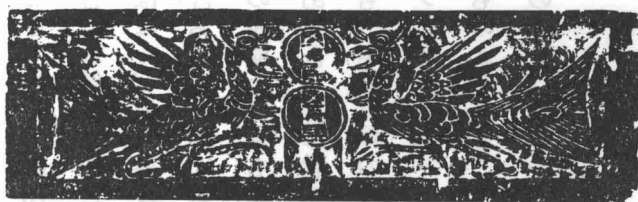


圖77 後漢 五銖錢を銜へる鳳凰の畫像石 沂南



圖78 前漢 銜珠鳳凰と樹の畫像磚 咸陽出土

ものを捧げた人身蛇尾の神がある。四川の漢代畫像石や畫像磚によく對で見えるものである。日神か月神か、かういふ天上の神もこの樹の上に降つたといふことである。鳳凰は珠を銜へ、その前に人間が小さく表はされる。幘をつけて坐る普通の人間の姿で、珠の方に手を伸し、これを受取らうとしてゐるやうである。この光景は何か。鳳凰が天から降り、前に坐つたこの男に珠の形で象徴された壽を授けることを意味すると考へ

る。珠は朱の聲に従ふが、朱と壽は同部ではないが音が極めて近く、漢時代に音が互に通ずることがあつた。⁹⁰ 鳳凰は天帝の使ひとしてよく知られる。⁹¹ 壽をもたらし使者としてふさはしい。鳳凰が珠を銜へた、或いは珠を授受する姿で表はされる例は漢代に少くない⁹²（圖74—76）。このやうな圖像を見た漢人が鳳凰が壽を銜へて降つて來たと考へたことはほぼ疑ひない所であらう。

右の推測を裏づけると考へられるのは次のことである。圖76の珠を間にした鳳凰と同様な型の圖像に圖77のやうに珠の代りに五銖錢を表はした圖像がある。この場合、五銖錢も珠と同様な意味の圖柄と考へられる。五銖錢は様々な形で漢代のデザインに使はれるが、これもただの錢ではなく、朱が壽の音に聞きなされ、その意味で目出度いものと意識されたに相違ない。鏡の銘文に頻繁に「壽如金石」と言ふなど、壽に對して強い願望を懷いてゐた漢人の耳には、錢文の五銖は吾壽と聞えたかと考へてよい。⁹³ さう考へると問題の錢樹といふものも、少々あつた所で高の知れた、けち臭い小錢を枝につけた樹といふわけではなく、萬人の願望の對象である吾が壽の意味の象徴を枝もたわわにつけた目出度い木といふことになる。さういふ木の枝の上に現れた西王母、東王公も、中國世界の東西の果の山に棲む神といったものではなく、鏡銘に「壽は東王公西王母の如からん⁹⁴」と言はれる長壽のシンボルとしての神と解されねばならない。かう考へると、この樹の頂上に飛來した鳳凰の銜へる珠を壽の意味を持つたものと解することは頗るこの造り物にふさはしいことと考へられよう。⁹⁵ なほ珠を銜へた鳳凰と樹といふテーマは他に圖78のやうな咸陽の前漢の例もあり、後漢に始まるものでないことに注意しておく。

以上、稀な錢樹の完形品の一例からこの類の造り物の性格を明かにした。その樹の上に表はされた神や仙人、動物等は、壽を象徴したその樹に降つたもので、これと同じ類の象徴的意味を荷つた者であつた。次に圖79の雲南昭通の後漢墓出土の例を見てみよう。四足で立つ動物の背に樹を立てる筒をつけた形の坐が残り、錢樹は殘破してゐる。圖79左上は對稱的な形から中央頂上の部分と思はれる。下部に牙をむいて靈芝を銜へる鋪首のやうな頭がある——頭上に菱形に近いものが

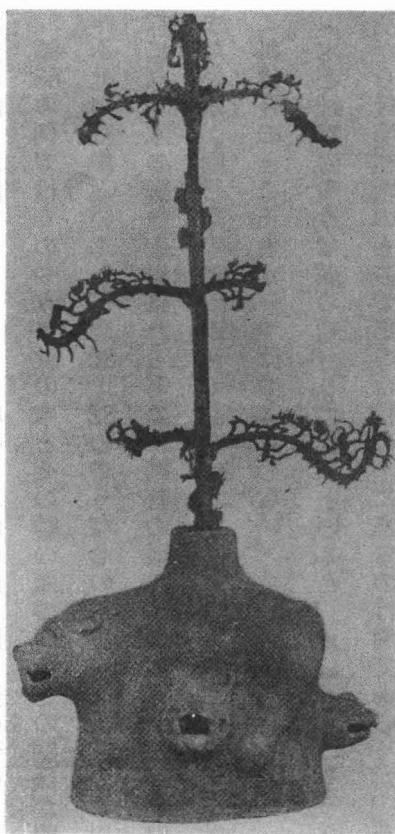
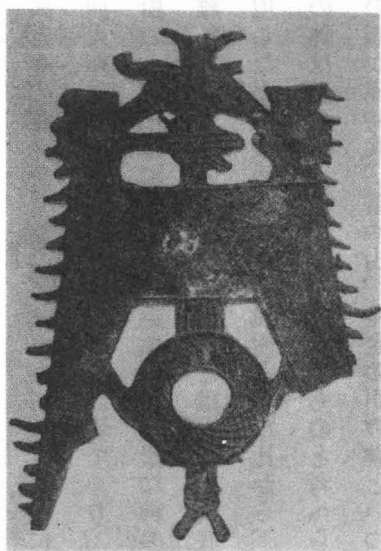
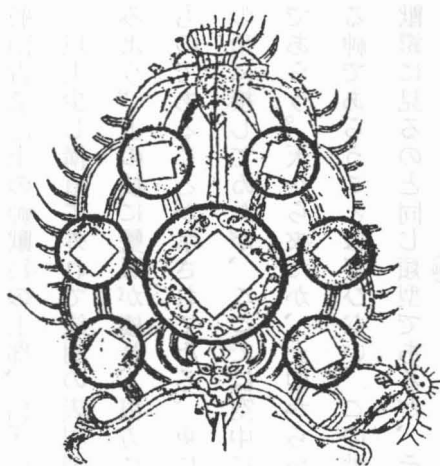


圖79 後漢 錢樹 昭通桂家院子出土

立ち、頭の横から羽毛のやうなものが出、逆梯形に大きく開いた口の形等、例へば後漢後期の獸首鏡に見るものに比せられよう。頭上に大きな方孔の錢の形を載せ、それから六個の小型の同形のものが出て、また頂上には靈芝が生えてゐる。錢樹の頂上につく問題の頭は、圖73からの類推でそこに降つた神話的存在と知られるが、それが中央頂上に、正面向に我が物顔で鎮座してゐる所からみて、中の主だつた者、その樹の主と見て良いであらう。

この墓の錢樹の殘片中にはまた圖79左下のやうなものがある。これも對稱的な形からみて樹の幹に沿つた部分と見られるが、その上部中央にも正面形の顔が見出される。この方は口に横木を銜へてゐる。この殘片が圖79左上と同じ器に屬するものかどうか確かめ様がないが、やはりそれと相近い性質のものと見られよう。

これらの神は頭だけしかないが、これは漢代によくある表現型式である。前引の獸首鏡は中央の四葉形で表はされた中國世界の四方にゐる天神を、このやうに頭だけで表はしたものと解され、また江田

船山古墳出土の神獸鏡の上部、伯牙の下に頭だけで表はされた神が見出される、等である。

以上少し横道に外れて錢樹の表現型式とその意味を考察して來たが、これを頭に置いて圖63の梧臺里石社碑の圖を見てみよう。上の技に雙鳳が棲り、根方に仙人がゐるなど、錢樹と同型の表現であり、この樹がさういつた存在をそこに致すものであることが示されてゐる。更に樹の上方には圖79左上に見たのと同様な神の頭があるではないか。圖79左上では樹の頂に接してゐたが、ここでは空中に離れてゐるといふ相違があるとはいへ、到底全く別な解釋を容れることはできないであらう。天から來たか、土中から出現したかは決め難いが、錢樹との類比から、これがこの木に憑つたこの社の主である神であらうことは疑ひない。この社の神は漢人によつてこんな姿のものと考へられてゐたのである。同時代の鋪首とか獸鑲に見るのと同じ類型であるが、その類が漢時代、雷や山、特定の川の神といった天地の神の圖像であつたことは筆者が先に證した所である。⁽⁹⁹⁾ここに梧臺里石社の神も同じ類の姿のものと表象されてゐたことが知られた。⁽¹⁰⁰⁾

圖63の例ではこのやうに社の木とその神の頭の圖像との關係が明かであるが、他に鋪首乃至それと同じ類の頭と、木を伴ふ社の圖像といふと、圖80—82のやうなものがある。圖80では根方に方形がついてゐて、圖71との類比から社の壇とそこに立つ木の圖像と思はれるものが鋪首の環の中に表はされ、圖81では同様なものが環の下、左右にある。圖82は環を銜まないが、同じ類の頭の圖像の左右に木がある。これらも恐らく社の神とその社の木といふテーマの一類と思はれるが、これは今のところもう一つはつきりしない。

木と鋪首のやうな面の結合した圖像といふと、別に圖83のやうなものがある。河南出土空心埴のスタンプ紋で、前漢末期から後漢初頃のものである。目の上にあるのは眉であらうが、その上方に三つに分れて附くものは通常の鋪首や獸鑲につくものとは異なり、木の葉狀の形に表はされてゐる。顔の中央に立つのは、圖8586のやうな樹木形のスタンプ紋と比べると、幹が三本の線で表はされる點まで共通してをり、どう見ても木のつもりとしか考へられない。鼻筋の下端は木の根のやうに左右に擴がつてゐる。圖79の錢樹の場合は、木の幹の頂部にこの木の主である神の頭が貼りついた形であつたの



圖81 後漢 鋪首と社の樹の畫像石 南陽出土

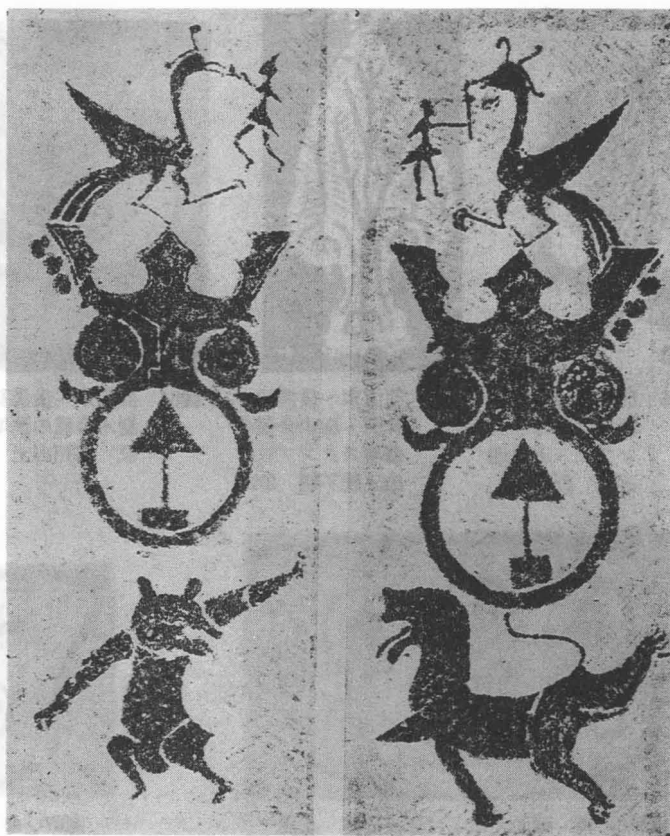


圖80 後漢 鋪首と社の樹の畫像石 南陽出土

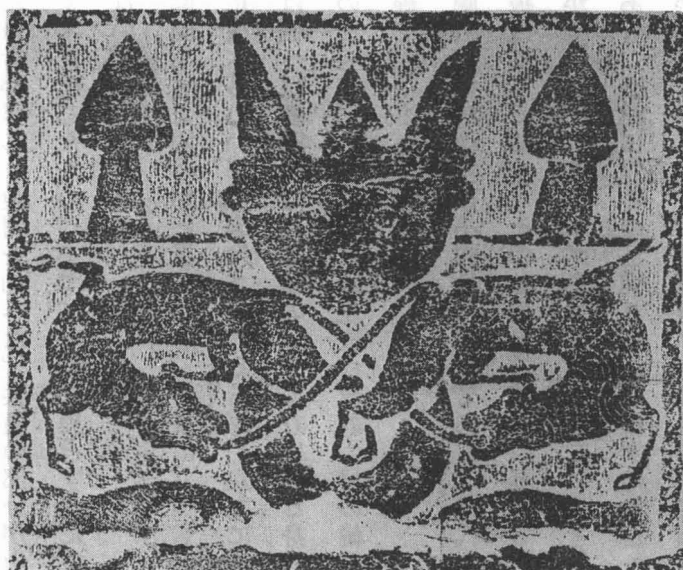


圖82 後漢 鋪首と社の樹の畫像石 嘉祥武梁祠



圖86 前漢末～後漢初
樹木の墓埴スタ
ンプ紋 出土地
不明 2/3



圖85 前漢末～後漢初
神面・樹木合體の
墓埴スタンプ紋
出土地不明 2/3



圖84 前漢末～後漢初 神面・
樹木合體の墓埴スタンプ
紋 鄭州出土

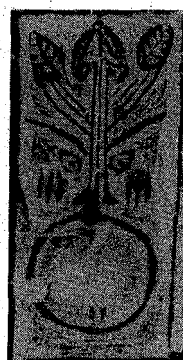


圖83 前漢末～後漢初
神面・樹合體の
墓埴スタンプ紋
鄭州出土



圖88 漢 神面・樹木合體紋の埴 泌陽

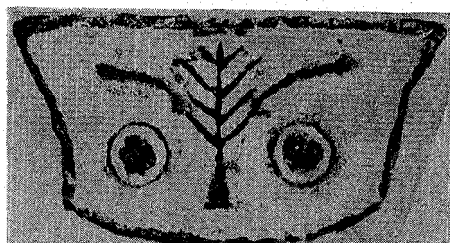


圖87 漢 神面・樹木合體紋の埴 泌陽

圖87は泌陽出土の小型埴の圖柄である。漢代として扱はれてゐるが、その如何なる時期に屬するかは明かでない。中央に木があつてその左右に大きな目があり、圖83に見るのと同じ形の眉は木の枝と一つながりになつてゐる。圖88も同地發見の同じ類であるが、目は木の上部の左右にあり、その下方の木の根方に一對のS字形の渦卷がある。この渦卷は鼻面から左右に分れる口の線の圖案化とも見得る。

圖84も右と同じ類と見られる。中央に立つものは更に樹木らしい形に表はされてゐるが、左右に出る枝は例へば圖80の鋪首で頭の上方左右に出る身體部分の形を存してゐる。目は左右に離れ、目の輪廓は直線で表はされてゐる。

であるが、この例では神の頭の上に木が貼りついた形である。鋪首の型式をもつた神の顔の頭上に出た二等邊三角形の突出物が山に化した例については、先に筆者が詳しく説明を加へた。⁽¹⁰²⁾ 共通の部分が山でなく木に化したものがあつても特に異とするには足りない。



圖91 前漢末～後漢初
神面・樹木合體形
の墓埴スタンプ紋
鄭州出土



圖90 前漢末～後漢初
神面・樹木合體形
の墓埴スタンプ紋
鄭州出土



圖89 前漢末～後漢初
神面・樹木合體形
の墓埴スタンプ紋
鄭州出土

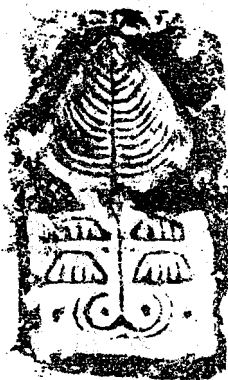


圖94 前漢末～後漢初
神面・樹木合體形
の社の墓埴スタン
プ紋 3/5



圖93 前漢末～後漢初
神面・樹木合體形
の社の墓埴スタン
プ紋

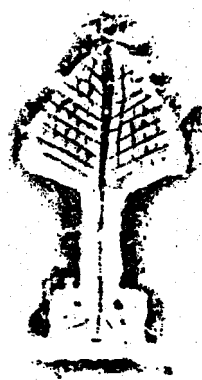


圖92 前漢末～後漢初
神面・樹木合體形
の墓埴スタンプ紋
3/5

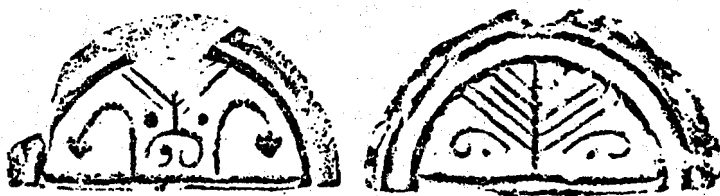


圖95 戰國 神面・樹木合體紋の半瓦當 臨淄齊故城出土 約1/3

以上圖83—88に見たやうな社の神の顔とそれの憑る木との合體の型式が認識できたら、圖89—94に示したやうな、木の根方に表はされた一對の圓點の由來も容易く理解されるはずである。圖89で目の上に木の幹と離れて斜めの線があるのは眉の名残と解される。圖92—94では木の根の所に上向に卷いた線がある。圖88の木の根方の上反りの線に當ると考へられよう。圖93で木の左右にあるのは先に引いた圖69—71の闕に對應するものであり、圖94では重なつた屋根だけに省略されてゐる。圖95は齊故城發見の戰國時代とされる半瓦當の圖柄である。この類は關野雄氏によつて紹介され、⁽¹⁰⁾古くよりよく知られる。圖柄も變化に富むがここには四例だけを引いた。一々説明することもあるまい。

社の木に或る顔を持つた神が憑つたことを示し、或いはその社の神がその姿を持つものであることを示すために圖63のやうに木の上方空中に、或いは圖79左上左下のやうに木の梢にその顔を表はすことはわかるとして、木の根方に、木と合體した形でそれを表はすといふやうな方式は、如何にして生れたのであらうか。それについては圖89—93のやうな表現がそれを打ち明けてくれる。これらで神の頭の表現されてゐるのは、社の壇に當る部分である。社の壇、即ち社の土製の「主」に恐らくこのやうな社の神の顔の表はされるものがあり、それがこの式の表現の原形となつてゐると考へる他あるまい。右のやうな社の壇の左右に目や眉だけを表はしたやうな簡略化された表現は圖95に見るやうに戰國時代にも極めて圖案化の進んだ形で現れてゐるが、一方、漢代にも圖83、84のやうな圖案化の程度の少ないものがある。従つて圖案化されはしても、それらが何を意味するかについての知識は、戰國—漢時代においても失はれてゐなかつたことが知られる。

兎も角、戰國よりも古い時代に、社の壇——社の土製の「主」——に社の木に憑る神の顔が表はされてゐたとすると、直ちに思ひ起されるのは良渚文化の玉琮——先に「主」と考へたもの——である。第一章に見たやうに、そこには一種類、または二種類の神面が刻されてゐた。その内の一種、不規則な卵形の目を持つた顔が太陽神を原形とするものであつたことは先に筆者の證した所である。⁽¹¹⁾このやうな顔を玉製の「主」——琮に刻する風は良渚文化以後絶えるが、恐らく社の土製の「主」である壇に表はす風は存續してゆき、戰國時代の半瓦當に圖95のやうな形で再び姿を現したと解せられる。日蝕

に際して社に鼓を打ち、牲を捧げたりするといふのも、社が天に通ずるといふやうな抽象的な理由でないことは先に注意したが、更に良渚の太陽神の傳統を傳へた顔が社の壇に畫かれ、太陽神は具象的にそこに現存したのであつたと考へれば、更に明快に理解することができるであらう。

良渚文化の神面が河姆渡文化の、雙鳥に挟まれた形で表はされたコロナの立ち昇る太陽に起源し、それに顔のつけられた良渚文化の圖像が山東龍山文化を経て殷、西周の所謂饕餮に變つてゆきながら、終始その兩側に外向きの雙鳳を伴ふ傳統を保持し、その型式は漢代の玉璧の圖柄にまで存續することも先に筆者の證した所である。⁽¹⁰⁵⁾その時に引かなかつたが、河姆渡文化の太陽神と殷の所謂饕餮の中間をつなぐ形で、良渚文化の玉製の琮の神面にも圖1(3)のやうに兩側に外向の鳥を伴ふ例が存在することは、先の筆者の考へを裏附けるものである。更に右のやうに見てくると、天神の憑る社の木に圖63のごとく鳳凰が一對棲つてゐる圖像も、同じ河姆渡文化以來の古い傳統につながるものであることが知られることになる。また漢時代、珠を銜へた鳳凰が多くの場合一對で表はされるといふのも、同じ傳統と見ることができるとはならないかと考へられてくる。

圖91—93は社の木の下の土壇に神面が表はされ、社の木はその社の神の頭の上に生えてゐるといふ形をとるのであるが、別に身體を持つた神話動物の頭乃至頸、背から木の生える形の表現がある。圖96は鄒縣出土の一對の同紋の畫像石の一つである。中央に頭があり、その兩側に身體のつく四足獸形の神話動物の頭から木が生えてゐる。木は節々に圓形紋があつて枝が絡み合ひ、その枝先はこれを取りまく環狀の枝に圍まれてゐて普通の植物ではない。環狀の枝の先には鳳凰が棲り、珠を連續的に吐き、羽根の生えた仙人が手を伸してそれを承けてゐる。一對の石で鳳凰は向ひ合つた一對を構成したと思はれる。この畫像を見ると、圖73で錢樹が動物の背に立つてゐた表現も、この木が動物の意匠のスタンドに立てられたといふのでなく、その動物の背から生えてゐることを表はしたのだと覺られる。また圖97の瓦當紋で足のない動物の



圖97 漢 神話的動物・樹の合體紋の瓦當
出土地不明



圖98 後漢 神話的動物・樹の合體圖の
畫像石 南陽出土



圖96 後漢 神話的動物・樹の合體圖の畫像石
鄒縣大故縣村出土

背から木が生え、周圍
に動物や鳥の群がつた
表現も同類であり、圖
98の畫像石で坐つた動
物の頭上に木が立つの
も、恐らく木の手前に
この動物が坐るのでな
く、この動物の頭から
この木——墓埧のスタ
ンプ紋の社の木と同じ



圖99 殷後期 尊 阜南 頭の兩側に身體のつく犧首

表現をもつ——が生えてゐる畫像と解すべきであるらしいことが知られる。

これら一連の表現の内、圖96の一頭雙身獸形は殷時代に間々ある、頭の兩側に分れて身體の表はされた犧首（圖99）を思ひ起させる。以前に筆者の論じたやうに、殷西周時代の犧首とは、最高神である帝より一ランク降る神で、帝と比べて地上性・肉體性を持ち、降つて漢六朝時代、河神、雷神、山神等として現れるものの先祖である。さうした性格の神で木に憑る類があつて、先の社の土製の「主」が顔だけを表はしたのと異り、身體を伴つたこの神の像を表はした「主」に木を植え、或いはそれに切つた木を挿す神祠があつて、それが圖像化されたのが右の類である、と琮形の「主」からの類推によつて想定することが許されると考へる。ここにこの類の圖像を引いて解釋を加へたのは、先の社の壇に神面が表はされてゐることについて、これは大した意味もない裝飾であつて木とこの顔は別に考へてもよいのではないか、との反論が豫想されるのであるが、さうではなく、兩者は有機的な關係にあつたと考へられることを、この親近な別の表現を引くことによつて排除せんがためであつたのである。

以上關係の文獻資料、遺物、圖像の考察によつて次のことが明かに

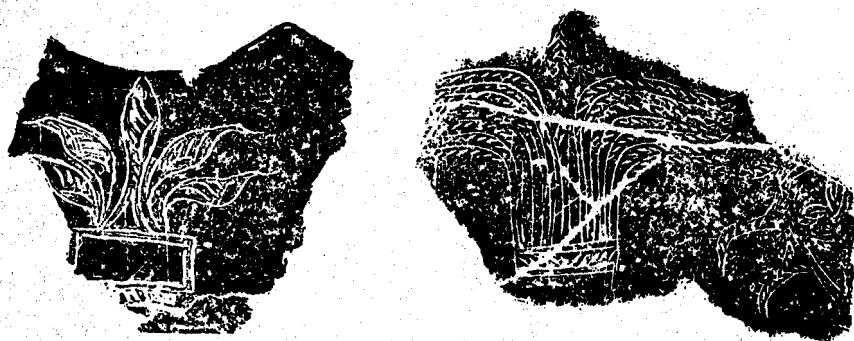


圖100 河姆渡文化 植物を束ねた圖の土器 餘姚河姆渡

された。方柱の長軸沿ひ、中央に孔を穿けた玉器の琮は、周時代に祖先の靈の憑り代として使はれたとされる木製の「主」の古い形であり、社の神の憑り代である土製の壇——社の「主」——も、大小や材質の違いはあつても同様方柱狀で中央に圓孔があつて、琮と基本的に同じ型式を持つものであつた。古く良渚文化の琮の側面に神面が彫られてゐるが、社の壇の側面にもそこに憑る神の面が表はされてゐた、といふわけである。良渚文化の墓で死體と共に多數の玉製の琮、璧、斧等が副葬されたものがあり、所謂玉斂葬として知られるに至つた。⁽¹⁰⁾そこに副葬された玉器が何等かの宗教的乃至呪術的意味を持つものと推測されながら、具體的にどのやうな働きがあつたかについては十分な説明がなされないままになつてゐることは前言に記した。ここに琮が神を憑らせる「主」であることが明かにされたとなれば、それはそれを死者の側に多數副葬することにより、そこに憑らせた神の生産力を死體の保存に役立て、死者の靈の活力を高めて子孫に良い影響を及ぼしてもらふことが期待された、と解することができに至らう。丈の長い琮を象つた佩玉⁽¹¹⁾が良渚文化から知られるが、同様な効果は、生きた人間によつても期待することができたものと思はれる。

最後に、社の土製の「主」である壇と琮とが大小の差こそあれ、同型式で同じ機能を持つたものといふことになると、琮も中央の孔に社の木に當るものを立てて使はれたのではないか、といふことが考へられることになる。然しそれについては證據が殆んどない。琮が祖先の祭祀に使はれた場合、中に挿されたものとしては茅を束ねた苴のやうなものが考へられる。先に三二頁に引いたやうに『五經異義』に神を憑らせる束茅が叢と

呼ばれ、社の木の叢を思ひ起させるのは、右の推測を裏づけるものであらう。⁽¹⁰⁾ 琮に茅の束が挿されたとすると、琮の形態の特徴の若干の解釋が可能となる。良渚の琮の中でも長大なものはさうでないが、低い類は第一章に見たごとく、孔の上下の口が少し擴がつたものがあるが、これは孔に茅等をぎつしりつめ込んで束するのに都合がよい形である。束茅を琮の孔に挿すのではなく、茅を琮で束して束茅にするといふわけである。また良渚文化の琮の内の丈の高い類について第一章に上に突出した圓筒部が下の突出部より高く、基部が削り込まれて外擴がりに見えるやうに成型され、上擴がりの方柱部と併せて口の少し開いた花瓶のやうな印象を與へることに注意した。この形の琮の口に神の憑る植物の束を挿すと想像すれば、それも含めた全體で釣合ひのとれた形になる、と想像される。

右の想像については圖100に引いた河姆渡出土の遺物の刻紋が参考にならう。圖100左は幅廣い葉狀のもの、圖100右は實のついた穗狀のものが浅い水盤に活けられたやうな形に見えるが、よく見るとさうでない。どちらも低い方形の底邊から短い線が下に出てゐる。これは水盤などに活けた、或いは植ゑたのではなく、紋様のついた堅い棒で束ねたといふ形である。これらの圖像の内、圖100右は陶盆に刻されたものであるが、圖100左の方は上が馬鞍狀になつた陶製品の上部中央に刻されてゐて、何か旗印的な役割が想像される。これらの圖像の立ち入つた考察は今後の資料の増加に俟たなければならないが、植物が下端近くで何か固い材質のものによつて束ねられてゐる點、琮の機能と關係して注目をひく。ともあれ、以上の考察によつて琮の何たるかについて大筋の性格は明かになつたとはいへ、具體的な用法の細部等についてはまだまだこれらの問題である。

注

- (1) この型式の玉器が清代に缸頭と呼ばれ、『説文』に「車缸に似る」と記される琮に該當する玉器であることは吳大澂の指摘した所である（吳一八八九、五八）。その他駟琮、大琮等の個々の種類の琮と實際の遺物との對應については筆者が以前に記した通りである（林一九六

九、二二八—二三〇頁、二八三—二八六頁）。

- (2) 以蒼璧禮天、以黃琮禮地、以青圭禮東方、以赤璋禮南方……
(3) 張光直は（張一九八七）琮を天の圓が地の方を貫く形と見、それは巫が天地を貫通することを象り、從つて巫がその働きをする時に助力する動物の像がそれに畫かれてゐる、と解釋する。そしてそれを所有す

ることは社會の有力者の權力の象徴とみなされた、と言ふ。紀元前三千年紀に始まる琮の形を、前千年紀末に始めてその存在の知られる天の圓と地の方の觀念によつて解釋することから出發するこの議論についてゆくことには些か抵抗を感じる。

- (4) 『周禮』典瑞に琮琕が類聘の際の贈り物用として、駟琮、疏琮が斂尸用のものとして、考工記、玉人に琮が桴の分銅として、大琮が宗后の内鎮として守る玉として記される。

- (5) 林一九六九、二八七—二九一。他に注(3)所引張氏の説。なほ先に筆者は琮の起原に關する諸説につき濱田一九二五、二三頁を引用したが、その内 Giesecke 氏の説については原の論文を見ることができなかった。近時濱田氏の引用する論文名、發表年、内容等に不正確な所のあることを知つた。改めて次に紹介しておく。Giesecke 1915 に琮の起原について次のやうに記されてゐる。即ち、琮の四側に附くプリズム状のものは附加的なもので、原初的なシンボルは一端から他端に穿たれた圓筒形の部分に他ならないとし(一四九頁)、これは堅穴住居の屋根の中央にあつた煙出しの筒に原形を持つと考へた。この孔は中雷と呼ばれ、家族的祭祀の對象の一つであつたが、『禮記』郊特性に「家主中霤、國主社」とあるやうに、中霤は天子や諸侯の土地の神、社に相當する。社の主についてシャヴァンヌは石製の壇であつたとするが、それが中央に孔が穿たれてゐたかどうかは知られない。また石製のものの他に玉製のものがあつたかについても決し難い。また土地神の祭祀がいつの時代に樹木崇拜と結びついたかも知れない、と言つてゐる(同、一五二頁)。琮の本質的な形態、社の「主」等、良い線を行つてゐる。「主」の形態がどのやうなものであつたかの洞察があつたならば、更に一步を進めることができたであらうと惜しめる。

- (6) 注一九八四、三四頁。
(7) 王一九八六、一〇一五頁。
(8) 王一九八六。
(9) 王一九八六、一〇一二頁。

- (10) 南京博物院一九八二、三四頁。
(11) 出土地不明の公私コレクションの中には例が少くない。

- (12) ここに口を表はすと言はれてゐるものは本來鼻であつた身體部分であると考へられる。鄧淑蘋氏は(鄧一九八六、八頁)圖2(1)の琮で問題の部分に兩端の巻き上つた線が刻まれてゐて小鼻を表はし、その下に上下方向に短い平行の線があつて齒を描寫してゐるらしいと言つてゐる。確かにさうであらう。鄧氏前引論文圖一〇の玉飾の顔は、掲げられた寫眞と拓本では明かでないが、實物を検すると兩目の下に今問題の玉琮の神面の鼻に當る横向の棒状の部分があるが、鼻筋からその部分にかけて、逆丁字状に連續した論廓線がめぐつてゐて、そこが製作者によつて明瞭に鼻と意識されてゐたことが知られる。またこの玉飾の神面の鼻の下の透し孔の兩側に、尖端が上下向におつ違ひになつた牙がはつきりと刻まれてそこが口と知られる。先の琮の鄧氏が齒と見た線も同様な牙の表現と見られる。ただ琮の神面に通常見られる、定型化の進んだ表現には鼻の下に口の表現は缺如してゐて、この水平の短い棒で表はされた部分が果して鼻と意識されてゐたかどうか確かめることができない。ここに渦紋が機械的に刻まれてゐたりするからである。或いは口と意識されることがあつたこともあり得よう。
- (13) この二種の神面については、圓い小さい目のものを女性の神、もう一方を男性の神とする考へがあるが(鄧一九八六、三九頁)、論證に飛躍がある。この二種の神面がどのやうな關係にあるかについての問題は、また新たな證據を得た時に改めて考へることにしたい。
- (14) 地中に埋る前に割れたのを、割れ口をきれいに磨つて平らにしたものである。これを所藏するノートン・ギャレリーのカタログに(Tane 1972, no.56) もこの琮の半分に少し缺けるもので意識的にこの形に仕立てられたもののやうである。切口の表面は他の面と同程度に風化してゐる、と記される。實物を検すると切口の一端に斜めに磨られた小部分があり、そこに割れ口の荒い面が少し磨り残されてゐる。完形のものを切つたのではなく、割れたのを磨つて今の形にしたものと推測される。この琮は細工が最高に精緻であり、神面に刻された渦紋も

細かく丁寧である。何かの事情で無残に割れてしまったものを廢棄するに忍びず、割れ口をきれいに磨り、見苦しくない形にして保存してゐたものと考へられる。

- (15) 例えは南京博物院一九八四、圖八、9。孔は穿孔具の磨耗により圓錐形をなすが、孔が完全な圓筒形のものとして他に例へばフリーア美術館 acc. no. 17. 56A の器がある。

- (16) 勿論出土地不明のコレクション中の遺物にも見出される。

- (17) 長大で穿孔が途中で喰ひ違ひ、段の修正がなされてゐない類の中でも、孔の内壁を磨いて光澤を出してゐるものがある。筆者の觀察した例では大英博物館藏の長さ四九・六 cm のもの (Jennys 1951, Pl. VII) がさうである。口からどれ程の深さまで磨いてあるかは埃に妨げられ、確かめてない。臺北の國立故宮博物院藏の高四二・三 cm のもの (國立故宮博物院一九八二、圖版一九) では、上下とも口から深さ數 cm の範圍まで磨いて光澤が出されてゐるが、それから奥は穿孔した時の地膚がそのままになつてゐる。これらは傳世品であるから、孔の内壁が出土からの状態であるのか、出土後の細工であるのかは確かめられないのであるが。

- (18) 廣東省博物館・曲江縣文化局、石峽發掘小組一九七八、九頁。

- (19) 報告書には圖 10 11 とともに玉琮と記されるが、一九八四年に香港で行はれた展覽會のカタログには (林業強一九八四、一六二—一六六頁) 圖 10 11 が灰色砂卡岩製と記され、報告書には發表されてゐない圖 9 は白色高嶺岩製と記されている。

- (20) 林一九八六、四一—四四頁。

- (21) 林一九八六 a、圖 55—58。

- (22) 例へば圖 5。他に例へば南京博物院一九八一、圖二一、5、南京博物院一九八四、圖九、8、9。

- (23) 中國社會科學院考古研究所山西工作隊、臨汾地區文化局一九八〇、三頁。

- (24) 仇等一九八三、九二八頁。

- (25) 中國社會科學院考古研究所山西工作隊、臨汾地區文化局一九八〇、二

- (26) 九頁。
同右。なほ、山西洪洞永凝堡西周墓から發見された「玉琮」は報告の記述 (山西省文物工作委員會、洪洞縣文化館一九八七、一四頁) を讀む限り、これと同じ類である。青玉の短く太い管狀で、多面柱體をなし、兩端に近い所に各々四本の横槽がある。高さ四 cm、外徑四 cm、内徑三 cm、横の幅一・二—一・五 cm といふ。發表されてゐる寫眞 (同、圖二〇) は模糊として役に立たない。西周時代に同地域の人が陶寺類型の古物を得て利用した可能性が考へられる。

- (27) 中國社會科學院考古研究所山西工作隊、臨汾地區文化局一九八三、四〇頁。

- (28) 仇等一九八三、九二八頁。

- (29) 淺原一九八四參照。

- (30) 林一九八六、二二頁。

- (31) 林一九八六、注(32)。

- (32) ウィンスロップ・コレクション中の琮に圖 11 のやうなものがある。

- (33) (Loehr 1975, No. 407, acc. No. 1943. 50. 500)。全體に整正に磨かれ、今問題にしてゐる琮の型式に作られてゐるが、圓筒部の一方の口の隅に、つるつるに圓くなつた手すれのあとが残つた部分がある (他方の口にはそのやうな箇所は見當らない)。これは使ひ古して手すれした古玉を全體に磨きなほした後、一部にもとの古い表面が磨き残されたものに相違ない。

- (34) 林一九八二。

- (35) 林一九八六、二二—二五頁。

- (36) 中國科學院考古研究所一九六二、一〇九頁、圖版六一、4。

- (37) 趙一九八六、五四頁。

- (38) 林一九六九、二八五—二八六頁。

- (39) 河北省文化局文物工作隊一九六五、圖五、同一九六五 a、圖一九。

- 漢時代に琮は作られなくなり、その本當の形もわからなくなつてゐる (林一九六九、挿圖六三) 所から考へ、許慎は戰國時代の琮に對應する訓詁が學者の間に傳へられて來たのを、知識としてくり返したもの

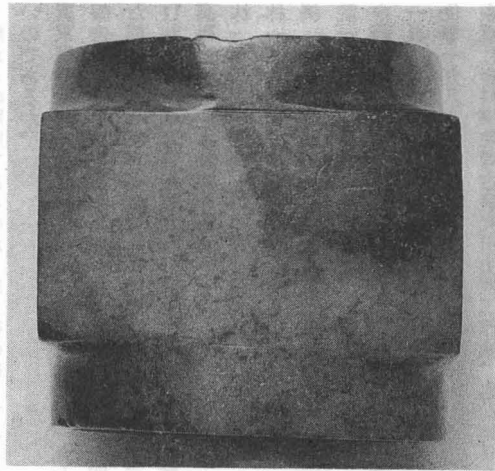


圖101 古玉の表面が一部に残る再生琮 Courtesy of the Harvard University Art Museums (Arthur M. Sackler Museum) Bequest-Grenville L. Winthrop 高 5.5 cm

と考へられる。

(40)

疏によるとこれは『孝經説』の文だといふ。

(41)

『初學記』第十二、宗廟第四に引かれる『五經異義』は「木主之狀、四方穿中央、以達四方、天子長尺二寸、諸侯長尺、皆刻識於背」と最後の句が加はつてゐる他、先に「正方」とあったのが「四方」となり、「達四方」の前に「以」が加はつてゐる。他に『穀梁傳』の文公二年、前引の條の晉の范甯の集解にも「其狀」として以下本文に引いた『五經異義』と同じ文が引かれてゐる。

(42)

『太平御覽』卷五三一引。

(43)

『通典』(四十八卷)に引かれる唐の制度ではこれに更に上下方向の孔が通じてゐることになつてゐる(大唐之制、長尺二寸、上頂徑一寸八分、四廂各刻一寸二分、上下四方通孔徑九分……)。

(44)

琮の「八方」について先に筆者は大琮の四周に八つの方形の突出部があることについて言つたものと解した(林一九六九、二八四頁)。琮の「八方」についてはまた別に、圖53のやうな、方柱から口の外に圓い

(45)

筒形を切り出す手間を省き、角張つた形を作り出した結果、そこが八角形になつた類を頭に置いて言つたものである可能性も考へられる。漢時代には「主」の形について別様に解する考へがあつた。『禮記』典禮、下「告喪曰天王登假、措之廟、立之主曰帝……」の孔疏に引かれる『白虎通』に

所以有主者、神無依據、孝子以繼心也、主用木、木有始終、又與人相似也、蓋記之爲題、欲令后可知也、方尺、或曰尺二寸

とある。先に見た説では高さ尺二寸とか一尺とか書いてあつたのが、ここでは方尺、尺二寸といふ。これは立方體のやうな形と想像される。立方體の「主」は確かにあつたことになつてゐる。『儀禮』覲禮に出てくる方明である。諸侯が天子のもとに覲した時、壇を作り、中央に方明を置くが、鄭玄はこれを宗廟の主になぞらへてゐる。

方明者上下四方神明之象也、上下四方之神者、所謂明神也、會同而盟、明神監之、則謂之天之司盟有象者、猶宗廟之有主乎

と。この方明はすぐ次の木文に記されるやうに一邊四尺の木製の正六面體である。前引『白虎通』の説は「主」をこの方式のものと考へるものである。他に引かない所をみると通説ではなかつたやうである。

右記とはまた別に『禮記』祭法「天下有主……」の條に引かれる『漢儀』(加地一九八五、三三七頁注③)によると後漢の衛宏の『漢儀』のこと)に

高帝廟主九寸、前方後圓、圍一尺、后主七寸『通典』四八所引では始めが「帝之主」となり、最後に「圍九寸木用栗」とある)

といふ。加地氏は(前引一五頁)この「前方後圓」の「主」につき、都出比呂志氏の考へを引き、長い食パンの切り口を底面にして立て、四角い方を手前に向けたやうな形と言ふ。そのやうな所であらう。これは漢代の朝廷に行はれた同時代の制で儒家に傳へられたものとはまた別系統のものと考へられる。

(46)

カールグレンは(Karlgren 1938, pp. 29-32)前引『公羊傳』何休注に記される「主」の形が玉器の琮に合致すると氣附いてゐる、然し氏

は「主」を所謂祖形品と考へてゐるため、それと琮とがあまりにもかけ離れた形を持つてゐることより、この考へを棄て、後に引く「祐」を「主」の容器とする杜預の説を採り、琮を「祐」に當てた。然し祐を石函と考へる杜預の解釋の當つてゐないこと、三〇—三一頁後述の通りである。

(47) 遷主はまた祖の名で呼ばれた。『周禮』春官、小宗伯に

若大師、則帥有司而立軍社、奉主車

とあり、鄭注に

遷主曰祖

とある。

(48) 孫詒讓は『周禮』前注所引の條の『正義』に天子の七廟のうち大祖廟と四つの親廟は「主」を持ち出して空にすることができないが、二つの祧廟は空にしてもかまはないからだと言ふ。

(49) 『太平御覽』五三一引。

同右

(50) 同右

(51) 馥案、石室者藏木主之石匣也、本書厘宗廟藏主器也、徐鍇曰、室以石爲藏主櫃也、石經文字、祐宗廟中藏主石室、馥謂、室讀如韓刀室之室。

(52) つづいて吳氏は「主」(祐)は火災を恐れて石室や石函に藏されたため、その容れ物も祐と呼ばれた、と祐を「主」とする説と「主」の容れ物とする説の妥協を計つてゐる。

(53) はつきり祐石函説を出したのは杜預であるが晉の頃には同じ説が出てくる。晉の摯虞『決疑要注』(『初學記』十三、宗廟第四所引)に

凡廟之主、藏於戶外西牖之下、有石函、故名宗祐

といふときである。

(54) 『太平御覽』五三一引。

(55) 祝饗、升取直降、洗之、入設于几東席上、東縮。

(56) 主人再拜稽首、祝饗、命佐食祭、佐食許諾、鉤祖、取黍稷祭于苴三、取膚祭、祭如初、祝取醢祭、亦如之、不盡、益反奠之、主人再拜稽首と、即ち主人再拜稽首し、祝饗す。佐食に命じて祭らしむ。佐食許諾

中國古代の玉器、琮について

し、鉤祖し、黍稷を取りて苴に祭ること三たびす。膚を取りて祭る。祭ること初めのごとくす。祝饗を取りて祭る。またかくのごとくす。盡さず、益し、反りてこれを奠す。主人再拜稽首す、と。

(57) 始死未作主、以重主其神也、重既虞而埋之、乃後作主。

(58) 注(56)参照。

(59) 惠士奇『禮說』、卷七、守祧の條。

(60) 無尸則禮及薦饌如初、既饗祭于苴

(61) 玄謂、道布者爲神所設巾、中霤禮曰、以功布爲道布、屬于几也、藉之言藉也、祭食有當藉者、館所以承藉、謂若今簞也、主先厘祖後館、互言之者、明共主以厘、共藉以簞、大祝取其主藉、陳之器則退也……

(62) 杜子春讀爲蕭、蕭香蒿也、玄謂、詩所云取蕭祭脂、郊特性云、蕭合黍稷、吳陽達於牆屋、故既薦然後燔蕭合馨香、合馨香者、是蕭之謂也、茅以共祭之苴、亦以縮酒、苴以藉祭縮酒泚酒也、醴齊縮酌

(63) 「昔成王盟諸侯于岐陽、楚爲荆蠻、置弗絕設望表、與鮮卑守燎、故不與盟」と。韋昭は注に「置、立也、絕謂束茆而立之、所以縮酒、望表謂望祭山川、立木以爲表、表其位也」といふが「所以縮酒」といふのは苴と用法を混同したものである。

(64) 林一九六六、七七—七八頁。

(65) 鄭伯肉祖、左執茅旌。

(66) 注に「升正柩者、謂將葬、朝于祖、正棺於廟也」と。

(67) 川原氏は(川原一九七三—八、一一、一三〇頁)土虞禮の苴につき、ちがやの白くて甘い根を使つたとする李時珍の説を引くが、當つてゐまい。

(68) フリア美術館藏の良渚文化の琮に一例だけ、孔の下の方から少し入つた所に底を嵌めるに便なやうに少し窪んだ溝様のものが作られたものがあるが(ac. No. 17. 56A)他の部分と比べ、表面の狀態が新しいやうに見える。

(69) 『禮記』郊特性に「周人尙臭、灌用鬯臭、鬱合鬯、臭陰達於淵泉……蕭合黍稷臭、陽達於牆屋……」と。また

「取膾膾燔燎、升首、報陽也」孔疏「祝乃取牲膾膾、燎於爐炭、入告

神於室、又出墮於主」と。

- (70) 圖3031の殷の大理石琮につけられた犧首は對蹠的な方向になつてゐる。これはここにやつて來た神がどちらから來ても正しい方向のものを、見る事ができるやうに、との配慮であると解せられないであらうか。

- (71) 石製の社の「主」については他に『淮南子』齊俗訓に「有虞氏之祀、其社用土……夏后氏其社用松……殷人之禮、其社用石（注、以石爲社主也）……周人之禮、其社用栗」とある。傳説ではあるが。

- (72) 『公羊傳』、莊公二十五年に「六月辛未朔、日有食之、鼓用牲于社、日食則曷爲鼓用牲于社、求乎陰之道也、以朱絲營社、或曰魯之、或曰爲闇、恐人犯之、故營之」

- (73) 小南一郎一九八七は各種の社が並存し、その内の一つから他の類が派生したといふやうに考へるべきでないとする。

- (74) 關野一九一六、本文、一五八一—一五九頁。

- (75) 駒井一九五〇、三五—三七頁。又駒井一九七四、四一—四四頁。

- (76) 中齋は堅穴住居の天井中央の煙出し、明りとり、孔、竇、或いは入母屋式の屋根に設けられた明りとり、天窓、王國維が考證した（『明堂廟寢通考』『觀堂集林』四合院の中庭の側の雨落ち等、時代と共に家屋の中での場所や作りは變つても、（顧一九七七、一四〇—一四五頁）雨が落ち、天と地の通ずる場所、といふことで社と性格が相通じ、對比されてゐるのである。

- (77) 郭一九八五、四四六頁。

- (78) 同、四三三頁。

- (79) 同、圖二。

- (80) 鄭注に「壇、壇與壝埒」といふ。壇は土盛りをした建築物の基壇狀の物で問題ないが、壝埒は問題があらう。孫詒讓はこの條の『周禮正義』で壇を中心に、その周圍の地上にめぐらされた低い垣を考へる。然し後引『逸周書』に記されるやうに、諸侯が王の社から分けてもらつた土で社の壇——壇と壝埒——を作るとなると、壝埒は壇と一體をなした構造物と見た方がよさうである。すると壝埒は先に引いた社

の明器（圖6466）で壇の上にめぐらされた柵に當る、土で作つた垣といふことにでもならうか。しかしそのやうな附屬的な、木で作つてもよいやうなものではなく、王から賜つた貴重な土を使ふのであれば圖66で壇の真中にある、中央に立つ木の周圍を圍ふ土盛りと見た方がよいのではなからうか。

- (81) 圖65の遺物は壇の上に陶製の垣はないが四隅に小孔がある。ここにはやはり木か何かの垣が立てられた可能性が大きいであらう。

- (82) 林巳奈夫編一九七六、四八一頁。

- (83) 朱一九六七、一三〇頁による。

- (84) 諸侯受命于周、乃建大社于國中、其壇東青土、南赤土、西白土、北驪土、中央以黃土、將建諸侯、鑿取其方一面之土、兼以黃土、苴以白茅、以爲社之封土、故曰列土於周室

- (85) 『周禮』封人「凡封國……」の條の疏所引、禹貢「徐州貢五色土」の孔安國傳、『白虎通義』社稷篇などにこの物語が反映されてゐる。

- (86) 小南一郎氏はこの社の土を生命力、増殖力をもつた「土」の觀念に結びつけてゐる（小南一九八五）。

- (87) 玉の「德」については林一九七三、二九—三六頁参照。

- (88) 『周禮』夏采注「故書綴爲纒」

- (89) 于一九六一。

- (90) 『説文通訓定聲』孚部第六、壽字の條に壽張の語がまた侏張、朱張と書かれることを引く（同僚尾崎雄二郎氏の教示を受けた）。

- (91) 林一九八六、三四頁。

- (92) 増田精一氏は（増田一九七二）『正倉院御物の阮咸（『正倉院御物圖録』一、第五〇圖）の一對の鸚鵡が小玉類を綴つた華麗な綬を銜へる意匠について「鳥獸が玉をくわえる意匠は漢代からのことであり、それが連珠という新しい形で展開をみたのが正倉院の阮咸にみる意匠である」とし、これがペルシアからの影響ではないことに注意してゐる。その通りと思はれる。梁上椿は『嚴窟藏鏡』三、七九圖、雙鸚鵡綬雀銜繡鏡の圖柄につき、鸞の頸にかけける長綬は長壽の意味だとしてゐるが（同書三八葉、前引鸚鵡の銜へる綬も同音の壽の象徴的な圖像的

表現と見るべきである。「唐書」音楽志二に則天武后の時に宮中に人間の言葉をつたす鳥が飼はれてゐて、いつも「萬歳」と稱へてゐた。それで樂を作つてこれを象つた。その舞には三人が緋の大袖をつけ鸚鵡を畫いた冠をつけ、鳥の像となした、という話があり、續いてこの鸚鵡は鸚鵡に似るが相違のある鳥であることが記される。唐鏡等のデザインに使はれたこの綬を銜へる鸚鵡のやうな鳥は、同時代の人の目から見ればこの萬歳、つまり萬歳までの長生き、壽を稱へる目出度い鸚鵡を、萬歳一壽と同音の綬を銜へた形で圖像的に表はしたものであつたに相違ない。この奇蹟の鳥が壽を銜へてくるといふ觀念とその圖像的表現は、先の筆者の考察によつて漢代にまで遡るものであつたことが知られるに至つたのである。

(93) 吾壽の語は『佩文韻府』には陸機の長歌行（陸平原集、樂府）「茲物苟難停、吾壽安得延」が引かれる。

(94) 羅一九二九、一〇葉。

(95) 壽、即ち長命のシンボルに充ちたこのやうな樹が、既に命の盡きた者と共に埋葬してあるのについては、それが被葬者の生前の持物であつたから、といふやうなことで説明されようか。

(96) 他に完形品としては甘肅甘谷縣漢墓の出土例がある（『新潮世界美術辭典』一五二三頁）。

(97) 樋口一九七九、一三五。

(98) 林一九八七、五〇—五二頁。

(99) 林一九八五、圖二一九上圖。

(100) 林一九八五。

(101) 筆者は京大考古學の卒業論文「戰國時代、漢代瓦埴に現れる樹木紋様について」においてこの梧臺里石社碑の樹木の上方の圖像をこの社の神と推測したが、適切な論證を行ふことができなかった。それから四十餘年、それに成功することができたと考へる。

(102) 林一九八五、二〇—二五頁。

(103) 關野一九五二。

(104) 林一九八六a、四三—四七頁。

中國古代の玉器、琮について

(105) 同右、五八—五九頁。

(106) 林一九八六a、三七—四三頁、林一九八五。

(107) 汪一九八七。

(108) 那志良氏に琮は方璽を大型化したものだといふ意見がある（那一九六四、二四頁）。方璽といふのは吳大澂の『古玉圖攷』（一二三葉）にこ

こに琮を象つた佩玉とした型式の玉器が掲げられ、方璽と題されてゐるのである。吳大澂はその題の下に「説文に玲璽は石の玉に次ぐものなり」と引いてゐる通り、璽は材質の名稱で器種名ではない。吳大澂が器物の名に使つたのは何かの勘違ひと思はれる。名稱はともあれ、このやうな型式の大型化したのが琮だといふのは本末顛倒である。

(109) 守屋美都雄氏は（守屋一九五〇、四三—四四頁）社の木は一本の木でなく木を束ねたものがより原始的な形だと考へてゐる。原始的かどうかは別にしても、そのやうな類があつたことは氏の考證する通りと考へる。

圖出所目錄

圖1 (1) 南京博物院一九八二、圖六

(2) 南京博物院一九八四、圖八、10

(3) 上海文物保管委員會一九八四、圖七、彩版、2

(4) 陳一九八四、彩版、3、南京博物院一九八四、圖八、11

(5) 左 南京博物院、崑山縣文化館一九八四、圖四

右 南京博物院一九八一、圖一一、4

圖2、(1) 圖、汪一九八四、圖八、2（筆者再仕上）寫眞、南京博物院一九八〇、圖六a

(2) 上海文物保管委員會一九八四、圖九

(3) 右 南京博物院一九八一、圖一一、5

中 南京博物院一九八四、圖九、3

左 同、圖九、8

圖3 京都大學人文科學研究所考古資料ファイル（以下京大人文研考古資料と略稱）

- 圖4 京大人文研考古資料
- 圖5 南京博物院一九八四、圖九、圖版四、1
- 圖6 『中華人民共和國南京博物院展』一七
- 圖7 南京博物院一九八一、圖版二、5
- 圖8 同、圖版二、4
- 圖9 『廣東出土先秦文物』一六七頁
- 圖10 同、一六五頁
- 圖11 同、一六三頁
- 圖12 左上 林一九八六、圖一〇七
左下 同、圖一〇八
右同、圖一〇九
- 圖13 京大人文研考古資料
- 圖14 中國社會科學院考古研究所山西工作隊、臨汾地區文化局一九八〇、圖版六、7、8
- 圖15 中國社會科學院考古研究所山西工作隊、臨汾地區文化局一九八三、圖一〇、1
- 圖16 京大人文研考古資料
- 圖17 京大人文研考古資料
- 圖18 京大人文研考古資料
- 圖19 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五、圖版五、10
- 圖20 上 林一九八六、圖一〇五
下同、圖一〇六
- 圖21 京大人文研考古資料
- 圖22 京大人文研考古資料
- 圖23 右上、左 京大人文研考古資料
右下 馮一九八五、圖版一、7
- 圖24 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版八二、4、中
- 圖25 中國科學院考古研究所一九八二、一三
- 圖26 馬等一九五五、圖版一八、2
- 圖27 京大人文研考古資料
- 圖28 京大人文研考古資料
- 圖29 京大人文研考古資料
- 圖30 梁、高一九七〇、圖版五六、1
- 圖31 梁、高一九六五、圖版二一、1
- 圖32 梁、高一九六二、圖版一九、9、10、圖版二〇、9、10
- 圖33 梁、高一九六五、挿圖二〇
- 圖34 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版八一、3
- 圖35 同、圖版八一、2
- 圖36 山東省博物館一九七二、圖九、4
- 圖37 吳一九七二、圖一三
- 圖38 京大人文研考古資料
- 圖39 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖版八二、4、左、右
- 圖40 梁、高一九七〇、圖版六一、22
- 圖41 Fogg Art Museum 寫真
- 圖42 陝西省文物管理委員會一九八六、圖五〇、1
- 圖43 德州行署文化局文物組、濟陽縣圖書館一九八一、圖一九、8
- 圖44 中國科學院考古研究所一九五九、圖版五一、8
- 圖45 趙一九八六、圖一〇
- 圖46 同、圖一一
- 圖47 Salmony 1952, Pl. 97.2
- 圖48 山東省博物館一九七七、圖二六、7、10、圖版一〇、3、右下
- 圖49 京大人文研考古資料
- 圖50 Luo 1950, Pl. 35.1
- 圖51 郭一九五九、圖版一一、5
- 圖52 邊一九七二、圖一一
- 圖53 同
- 圖54 郭一九五九、圖版三四、1、6、21、圖版三五
- 圖55 中國科學院考古研究所一九五六、圖版九四、14
- 圖56 山西省考古研究所、山西省晉東南地區文化局一九八六、圖三一、9、圖版四、5

- 圖 57 山西省文物管理委員會、山西省考古研究所一九六四、圖版七、13
 圖 58 湖南省博物館一九七二、圖版一二、3
 圖 59 京大人文研考古資料
 圖 60 Salomon 1963, Pl. 13. 1
 圖 61 遼東博物院寫真 (Palmgren 1948, Pl. 53. 7)
 圖 62 林一九六九、挿圖六五
 圖 63 關野一九一六、第二四五圖
 圖 64 駒井一九五〇、圖版二三、3
 圖 65 同、第二十圖
 圖 66 郭一九八五、圖四、15、圖一六
 圖 67 周等一九八五、一六二
 圖 68 同、一九六
 圖 69 王一九三五、下、樓樹五
 圖 70 內蒙古自治區博物館文物工作隊一九七八、一〇〇
 圖 71 王一九三五、下、樓樹四
 圖 72 同、下、樓樹六
 圖 73 『中華人民共和國四川省文物展』八七、描起し圖筆者
 圖 74 王、朱一九七六、圖三
 圖 75 Chavannes 1909, no. 129 より
 圖 76 傅一九五〇、二二八より
 圖 77 曾等一九五六、圖版三八
 圖 78 咸陽市文管會、咸陽市博物館一九八二、圖版三、2
 圖 79 雲南省文物工作隊一九六二、圖版二、4、7、圖六、2
 圖 80 南陽漢代畫像石編輯委員會一九八五、四〇九、四一〇
 圖 81 同、四一七
 圖 82 Chavannes 1909, no. 63
 圖 83 河南省文化局文物工作隊第一、二隊一九六三、四九
 圖 84 周等一九八五、六五
 圖 85 王一九三五、上、一
 圖 86 同、下、樓樹一六

中國古代の玉器、琮について

- 圖 87 周等一九八五、二六三
 圖 88 同、二六四
 圖 89 同、一九五
 圖 90 河南省文化局文物工作隊第一、二隊一九六三、二八
 圖 91 周等一九八六、四五
 圖 92 王一九三五、下、樓樹一〇
 圖 93 張一九八五、圖二四
 圖 94 王一九三五、下、樓樹一
 圖 95 山東省文物管理處一九六一、圖八、3、4、10、11
 圖 96 山東省博物館、山東省文物考古研究所一九八二、圖96
 圖 97 王一九八四、圖二
 圖 98 南陽漢代畫像石編輯委員會一九八五、三八三
 圖 99 米澤一九六三、表紙カバー
 圖 100 河姆渡遺址考古隊一九八〇、圖六、5、6
 圖 101 京大人文研古資料

引用文獻目錄

- 日本文、中國文
 淺原達郎一九八四「夏文化探索の道」『古史春秋』一、一八一—二八頁
 于豪亮一九六一「錢樹、錢樹座、和魚龍漫衍之戲」『文物』一九六一、一
 一、四三—四四五頁
 雲南省文物工作隊一九六二「雲南昭通桂家院子東漢墓發掘」『考古』一九六
 二、八、三九五—三九九頁
 王巍一九八六「良渚文化玉琮刳議」『考古』一九八六、一一、一〇〇九—
 〇一六頁
 王志傑、朱捷元一九七六「漢茂陵及其陪葬冢附近新發現的重要文物」『文物』
 一九七六、七、五一—五五
 王振鐸一九三五『漢代壙輓集錄』北平
 王丕忠一九八四「秦漢瓦當管見」『文博』一九八四、一、二五—二九
 汪遵國一九八四「良渚文化、玉斂葬、述略」『文物』一九八四、二、二三—

三五頁

加地伸行一九八五『中國思想からみた日本思想史研究』東京

河南省文化局文物工作隊第一、二隊一九六三『河南出土空心磚拓片集』北京

河姆渡遺址考古隊一九八〇『浙江河姆渡遺址第二期發掘的主要收穫』『文物』

一九八〇、五、一一—一五頁

河北省文化局文物工作隊一九六五—一九六四—一九六五年燕下都墓群發掘報告『考古』一九六五、一一、五四八—五六二頁

河北省文化局文物工作隊一九六五a『河北易縣燕下都第十六號墓發掘』『考古學報』一九六五、二、七九—一〇一頁

郭清華一九八五『陝西勉縣老道寺漢墓』『考古』一九八五、五、四二九—四四九

郭寶鈞一九五九『山彪鎮與琉璃閣』北京

川原壽市一九七三—八『儀禮釋攷』京都

『廣東出土先秦文物』(展覽會カタログ) 香港、一九八四

廣東省博物館・曲江縣文化局、石峽發掘小組一九七八『廣東曲江石峽墓群發掘簡報』『文物』一九七八、七、一一—一五頁

咸陽市文管會、咸陽市博物館一九八二『咸陽市空心磚漢墓清理簡報』『考古』一九八二、三、二二五—二三五頁

仇士華、蔡運珍、冼自強、薄官成一九八三『有關所謂「夏文化」的碳十四年代測定的初步報告』『考古』一九八三、一〇、九三—九二八頁

小南一郎一九八五『大地の神話—蘇・禹傳說原始』『古史春秋』二、二三頁

小南一郎一九八七『社の祭祀の諸形態とその起源』『古史春秋』四、一七一—一七三頁

吳振求一九七二『保德新發現的殷代青銅器』『文物』一九七二、四、六二—六六頁

吳大澂一九八九『古玉圖攷』

湖南省博物館一九七二『長沙瀏城一號墓』『考古學報』一九七二、一、五九—七二頁

國立故宮博物院一九八二『故宮古玉圖錄』臺北

駒井和愛一九五〇、『遼陽發見的漢代墳墓』東京

駒井和愛一九七四『中國考古學論叢』東京

山西省考古研究所、山西省晉東南地區文化局一九八六『山西省潞城縣潞河戰國墓』『文物』一九八六、六、一一—一九頁

山西省文物管理委員會、山西省考古研究所一九六四『山西長治分水嶺戰國墓第二次發掘』『考古』一九六四、三、一一—一三六頁

山西省文物工作委員會、洪洞縣文化館一九八七『山西洪洞永凝堡西周墓』『文物』一九八七、二、一一—一六

山東省博物館一九七二『山東益都蘇埠屯第一號奴隸殉葬墓』『文物』一九七二、八、一七一—三〇頁

山東省博物館一九七七『臨淄郎家莊一號東周殉人墓』『考古學報』一九七七、一、七三一—一〇三頁

山東省博物館、山東省文物考古研究所一九八二『山東漢畫像石選集』濟南

山東省文物管理處一九六一『山東臨淄齊故城試掘簡報』『考古』一九六一、六、二八九—二九七

上海文物保管委員會一九八四『上海福泉山良渚文化墓葬』『文物』一九八四、二、一一—一五頁

朱右曾一九六七『逸周書集訓校釋』臺北

周到、呂品、湯文興一九八五『河南漢代畫像磚』上海

『正倉院御物圖錄』一、一九二八、東京

關野貞一九一六『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』東京

關野貞一九五二『半瓦當の研究』東京

陝西省文物管理委員會一九八六『西周鎬京附近部分墓群發掘簡報』『文物』一九八六、一、一一—三一頁

曾昭燁、蔣寶庚、黎忠義一九五六『沂南古畫像石墓發掘報告』北京

『中華人民共和國四川省文物展』(展覽會カタログ) 廣島、一九八五

中國科學院考古研究所一九五六『輝縣發掘報告』北京

中國科學院考古研究所一九五九『洛陽中州路』北京

中國科學院考古研究所一九六二『濰西發掘報告』北京

中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五『河南偃師二里頭發掘簡報』『考

古』一九六五、五、二五—二四頁

中國社會科學院考古研究所一九八〇『殷墟婦好墓』北京

中國社會科學院考古研究所一九八二『殷墟玉器』北京

中國社會科學院考古研究所山西工作隊、臨汾地區文化局一九八〇『山西襄汾縣陶寺遺址發掘簡報』『考古』一九八〇、一、一八—二二頁

中國社會科學院考古研究所山西工作隊、臨汾地區文化局一九八三『一九七八—一九八〇年山西襄汾陶寺墓地發掘簡報』『考古』一九八三、一、三〇—四二頁

張光直一九八七『談・琮、及其在中國古史上的意義』『文物出版社成立三十周年紀念文物與考古論集』二五—二六〇頁

張秀清一九八五『鄭州又發現一批漢畫像磚』『中原文物』一九八五、二、一七—二〇

趙叢蒼一九八六『記鳳翔出土的春秋秦國玉器』『文物』一九八六、九、五三—五七頁

陳麗華一九八四『江蘇武進寺墩遺址的新石器時代遺物』『文物』一九八四、二、一七—二二、五頁

鄧淑蘋一九八六『古代玉器上奇異紋飾的研究』『故宮學術季刊』四、一、一五—一八頁

德州行署文化局文物組、濟陽縣圖書館一九八一『山東濟陽劉臺子西周早期墓發掘簡報』『文物』一九八一、九、一八—二四頁

那志良一九六四『玉器通釋』上、香港

內蒙古自治區博物館文物工作隊一九七八『和林格爾漢墓壁畫』北京

南京博物院一九八〇『江蘇吳縣草鞋山遺址』『文物資料叢刊』三、一一—二四頁

南京博物院一九八一『江蘇武進寺墩遺址的試掘』『考古』一九八一、三、一九—二〇〇頁

南京博物院一九八二『江蘇吳縣張陵山遺址發掘簡報』『文物資料叢刊』六、二五—三六頁

南京博物院一九八四『一九八二年江蘇常州武進寺墩遺址的發掘』『考古』一九八四、二、一〇九—一二九

中國古代的玉器、琮について

南京博物院、崑山縣文化館一九八四『江蘇崑山綽墩遺址的調查與發掘』『文物』一九八四、二、六一—二頁

南陽漢代畫像石編輯委員會一九八五『南陽漢代畫像石』北京

馬得志、周永珍、張雲鵬一九五五『一九五三年安陽大司空村發掘報告』『考古學報』九、二五—九〇頁

濱田耕作一九二五『有竹齋古玉圖譜』

林巳奈夫一九六六『中國先秦時代の旗』『史林』四九、二、六六—九四頁

林巳奈夫一九六九『中國古代の祭玉瑞玉』『東方學報』四〇、一六—一三三頁

林巳奈夫一九七三『佩玉と綬—序説—』『東方學報』四五、一—五七頁

林巳奈夫一九八二『中國古代の石廬丁形玉器と骨鏤形玉器』『東方學報』五四、一—八頁

林巳奈夫一九八五『獸鑲、鋪首の若干をめぐって』『東方學報』五七、一—七四頁

林巳奈夫一九八六『殷墟婦好墓出土の玉器若干に對する注釋』『東方學報』五八、一—七〇頁

林巳奈夫一九八六 a『殷周時代青銅器紋樣の研究』東京

林巳奈夫一九八七『中國古代における蓮の花の象徴』『東方學報』五九、一—六頁

林巳奈夫編一九七六、『漢代の文物』、京都

樋口隆康一九七九『古鏡』東京

傅惜華一九五〇『漢代畫像全集』北京

馮漢驥一九八五『馮漢驥考古學論文集』北京

邊成修一九七二『山西長治分水嶺一二六號墓發掘簡報』『文物』一九七二、四、三八—四六頁

增田精一八九七二『綬帶をつけた鳥獸意匠の比較—東西文化交流に關聯して—』『東洋學術研究』一一、三、九三—一〇九頁

守屋美都雄一九五〇『社の研究』『史學雜誌』五九、七、一九—五二頁

米澤嘉圃一九六三『中國美術』一、東京

羅振玉一九二九『漢南京以來鏡銘集錄』『遼居雜著』

七二

梁思永，高去尋一九六二『侯家莊，第二本，一〇〇一號大墓』臺北
梁思永，高去尋一九六五『侯家莊，第三本，一〇〇二號大墓』臺北
梁思永，高去尋一九七〇『侯家莊，第五本，一〇〇四號大墓』臺北

歐文

Chavannes, E., 1909: *Mission archéologique dans la Chine septentrionale*,
Paris
Gieseler, G., 1915: La tablette tsong du Tcheou li, *Revue archéologique*,
Cinquième série - T. II, Septembre-Octobre 1915, pp. 126-154
Jennyns, S., 1951: *Chinese Archaic Jades in the British Museum*, London
Jane, Horace H. F., 1972: *A Handbook of the Chinese Collections in the*

Norton Gallery and School of Art, West Palm Beach

Karlgren, B., 1938: Some Fecundity Symbols in Ancient China, *Bulletin
of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 2, pp. 1-54
Loehr, M., 1975: *Ancient Chinese Jades from the Grenville L. Winthrop
Collection in the Fogg Art Museum, Harvard University*, Cambridge
Loo, C. T., 1950: *An Exhibition of Chinese Archaic Jades*, 1950
Palmgren, N., 1948: *Selected Chinese Antiquities from the Collection of
Gustaf Adolf, Crown Prince of Sweden*, Stockholm
Salmony, A., 1952: *Archaic Chinese Jades from the Edward and Louise
B. Sonnenschein Collection*, Chicago
Salmony A., 1963: *Chinese Jades through the Wei Dynasty*, New York